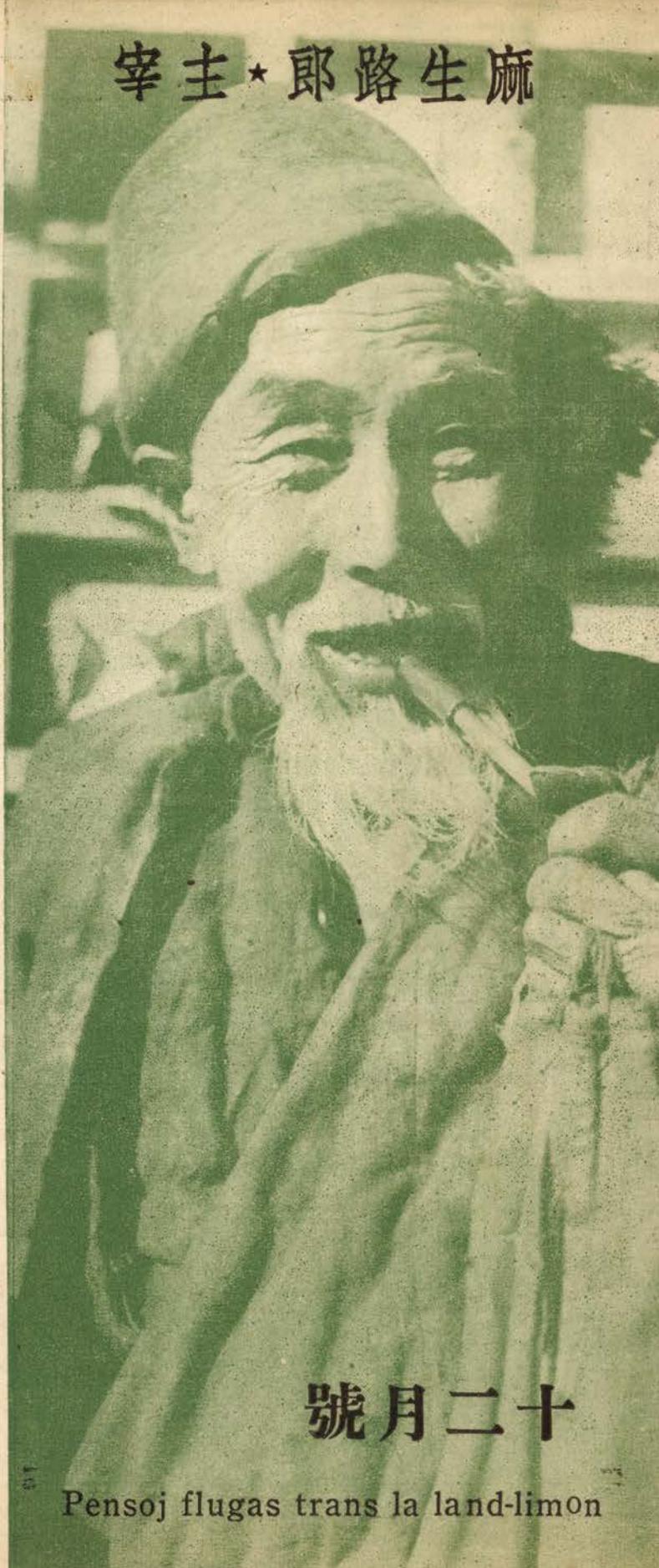


麻生路郎主幸



二十月號

Pensoj flugas trans la land-limon

川

柳

の

証



師走柳川大會

没句供養の夕

★ 此の参持句一句没す必は者席出 ★

★牛みの親にとつては自分の子供程可愛いものはないだらう。同じやうに自分の牛み出した句程いいものはない。そのいし句が世に出る迄には幾多の句が下積となつて葬られてゐることであらう。この死番兄とも言ふべき没句が成佛するやうに供養しようといふのが、今回本會を開くに至つた主旨なのである。一連の華でもたむける氣持で揃つて參會を願ひたい。没句供養とはいふもの、しよつ込む會ではさららない。没句が浮はれるやう川柳的に願ひを願ひたい。没句供養の一端をお知らせすれば、先づ參會者に没句「一句」御持參を願ひかねた川柳親朋讀の下に浮火に投じ、學びに法養することとし、多數の實品の他に相供養として、參會者に願ひなく印章の川柳題真一葉宛贈呈、又抽籤で有志揮毫の短冊を差上げることになつてゐます。本會は川柳界にとつても記録すべき、非常に有意義な催しであると信ずる。恐らく川柳を創る人で没句に経験のない人けなげに、晝夜は是非萬體御健合せ御家族、御友人お誘合せの上御出席を願ひたい。

日時 十二月六日(土) 自午後五時半至九時半
會場 御津八幡宮
附屬八幡町佐野屋醫務所
本館電停東二丁(電話南八六四〇)

司會者 田中風葉 戸倉普天

挨拶 兼題

「入門」(三句) 橋本綠雨選
「外交」(三句) 須崎豆秋選
「未練」(三句) 清水白柳子選
「水兵」(三句) 河野夜王選

▼締切十二月五日午後五時着(本社郵送)

席題 三題 (題及選者は晝夜發表)

「没句の種々相」麻生路郎
「押賣」石井白面人

會費 金五拾錢 ★没句のみの方は兼題と共に小寫替五十錢又は郵券同封のこと。

賞品 ▼天地人五客(各題)へ呈賞

尚兼題の天位に限り別に路郎主幹の短冊一葉を贈呈。出席者全部には粗品を呈上。

記念撮影 希望者に實費で頒つ

大阪市西區江白堀上通二丁目四番地(昭和ビル)

川柳雜誌社

電話土佐堀三三三三・八六一三・八六一四

二十月中句發賣

穿ち一天張りの川柳でなければ満足出来ない人が石會根民郎の川柳を読んだら、これが川柳ですかこれでもいゝのですかと反問するかも知れない。それほど石會根民郎の川柳には穿ち味は稀薄である。しかし、それが俳句かと云へばノ！と誰でも答へるほど俳句からは遠いものである。彼は信州の産。純情の持主。彼の句には彼独自の個性が盛り上つて異色ある川柳を構成してゐる。彼の句は漫畫に出来ない句が多い。所謂川柳らしい川柳の境地から抜け切らぬ悩みを持つ川柳人の一讀を薦めたい。

B6版・和綴木版裝函入 定價一圓 (發賣九錢)



待望の句集出づ！
石會根民郎川柳句集

川柳と漫畫

累卵の遊び

特價八十錢(送料九錢)

麻生路郎著 柴谷柴舟畫

発行所 不

振替大阪三〇三九二番

歳末一言

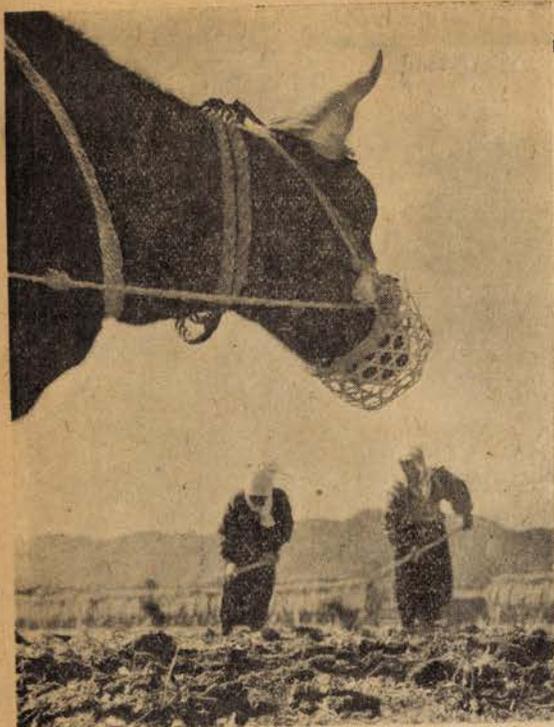
國策に沿うて、馬車馬的に駛

つた。そして本年も十二冊を積

んで、二百十五號を世に送つた

新日本文化昂揚のために

主 幹 麻 生 路 郎



牛借りまるとはにけるか休閑地 八歩カメ井 哲

川柳雑誌 十二月號目次

表紙：蒙古の老人……………岩崎柳路

川柳寫眞……………八歩・哲

歳末一言……………麻生路郎(一)

隨想・丹波の猿公猪公其他……………小山文三(二〇)

川柳解題と例句……………麻生路郎(二六)

武玉川四篇研究(三三)……………梅本聖山

小石……………須崎豆秋(二八)

川柳佛説阿彌陀經……………戸田孤蓬(三三)

寸談交々……………麻生葭乃(三五)

犀利縱横(一人一句詠)……………諸家(三五)

食ハンは啜ふ……………岡田某人(二九)

吟行地奈良篇(二〇)……………麻生路郎(二二)

ビル街の雑音……………後藤田凡生(二二)

川柳世界史(一〇)……………戸田孤蓬(三三)

K市まで……………麻生アト(二〇)

漫筆は動く……………小畑自有波(二五)

豆ニュース……………(二七)

★

近作柳柳……………麻生路郎選(二六)

川柳塔……………麻生路郎選(二八)

同舟近詠……………諸家(二六)

一食後……………奥村丹路選(二六)

集名……………菊澤小松園選(二六)

各地柳壇……………(二〇)

川協……………柳界展望(二六)

社關係の人々……………後記(二六)

川柳書架(大)……………(二七)

前に安置してあるが、外部から拜むことは出来ない。そしてこの木彫像で他に出開帳をしたのだそうである。

★わが國で勝軍地藏といふものを信仰したのは古くからで、元明天皇の和銅六年の勅撰になる諸國風土記の甲斐の部に「都留郡行瀨寺寄田二十五東 敏達天皇十四年日羅三月有密室行勝軍地藏之法之寺也」の記載があるので判らう。「佛像圖彙」には愛宕権現として地藏尊の甲冑馬上像を出し、同権現の奥院太郎坊にある將軍地藏が本宮である旨が添書されてあるそうであるといふ説は百濟の僧日羅がこの密法の最初の將來者といはれるところから出たものか、いづれにしても鑑地藏の形像は形相の素れて儀軌に添はない圖像の頻出した南北朝末から足利期へかけての産物であらう。従つて笠屋町の鑑地藏も足利期のものであらう。

名も高き音羽の山のいくさ神 そのいさほしにみよぞおさまる
といふのがこの鑑勝軍地藏尊の御詠歌である。

★川柳では

武運長久鑑地藏の繩張りか 路 郎
聖戦へ鑑地藏のうしろ 同
だて
鑑地藏へ一ト旗あける 同
氣で拜み 同

★この地藏堂の南側は地藏町で二間幅ほどの道路になつてゐるが、昭和四五年ごろまでは三尺幅位な不鳴川といふ小さな川があつたそうである昔弘法大師が勉強をされてゐた時に蛙が澤山ゐて、喧しいので、アツチへ行くやうにと云はれた。ところがそれから蛙が鳴かないやうになつたので、なかず川と呼ぶようになつたのだそうである。同じ川で川下では鳴く川と書いて鳴川と云うてゐる。それが現在鳴川町といふ町名となつて残つてゐるのだそうである。

★鑑地藏は安産に効験があると云つて、今でも町民の尊信がなかく厚い。

この地藏尊については、いろいろな傳説がある。ある乞食が地藏堂の椽の下で寝て居たところが、堂内で頻りに人の話聲がするので、そつと覗くと地藏尊が産婦の模様を語つてゐられる話聲だつたので、乞食は驚いて、その家々へ出か

けて産婦の容態をきくと、まつたく地藏尊の話と、そつくり符合してゐたといふのである。また「平城坊目考」には「先年笠屋町焼亡當堂乾ノ角餘相に及ぶといへども火災なし時の人奇なりとす」と出て

幅約三尺五寸ばかりのくすぶつた自然石に、身の丈け三尺ほどの地藏立像が線刻されてゐる。
★この地藏尊は俗間で「萬直し地藏」と呼ばれて信心が絶えない。



作林杏西今 (彫刀一) 砂高 形人良奈

ゐる。

(50) まんなをし地藏

★二月堂のお茶所の突當りを登り、小徑について迎ると奥まつた空地にまんなをし地藏が立つてゐる。高さ約四尺

單純な迷信から四邊の土を掘り返して、今でも金を探す人を見かけるそうである。
★昔このあたりに天地院と稱する寺があつたそうであるから、この萬直し地藏も、もとは天地院に属したのかも知

れない。

★まんなをし地藏を詠む。
まんなをし國際運も頼まれる
身から出た錆をたのむもまんなをし
此の危機を救ひ給へと 無理な願
七轉び八起きを祈るまんなをし
まんなをし地藏無慾に 路 郎
なれといふ 同

(51) 奈良の宿

★奈良の宿屋は、從來看板の古さと、番頭まかせで營業を續けて來たので、近所の人でさへ番頭を主人と間違へることは珍らしくないそうである。

★看板と云へば、「水戸黄門御本陣」「梅川忠兵衛お遊びの茶や」といふ看板を表の柱に懸けた宿屋がある。奈良の昔の宿屋と云へば「印判屋」と「小刀屋」が有名であるが、印判屋庄右衛門が母屋で小刀屋善助は隠居だそうである。水戸黄門が泊まられたのも、梅川忠兵衛が遊んだのも小刀屋の方である。尤も建物はその當時のものではない。現在の金波樓が印判屋であり、好生館が小刀屋であるが代變りがしてゐるので、昔

を愚ぶ材料は何一つ残つては
ない。

★奈良の宿屋は今では提灯
を持つて驛へ出迎へたり、宿
引がうるさくつき纏ふことが
許されなくなつた。番頭が店
先に出て僅に手首で招くに過
ぎないが以前は驛を出て第一
に印象に残るものは宿引であ
つた。

宿引の平手は揃ひ入れ
るやう

謙 穂

といふ句が大正時代の句とし
て記憶に残つてゐるが、たし
かに當時の宿引を想起させる
に充分である。地の利の悪る
い横町の宿では給料の高い宿
引を雇うて客引競争をやつた
ものだ。

★旅館は大體、省線奈良驛

附近から三條通方面と、關急
線奈良終點からでは公園及び
猿澤池附近、若草山附近に散
在してゐる。次に旅館名をア
イウエオ順に列擧すると、

あぶらや旅館、朝日館、いろ
は館、魚佐旅館、多びすや、
奥田旅館、大阪屋旅館、龜佐
旅館、かのこ、紀之國屋、き
くや、金波樓、好生館、奈良
新温泉、敷島館、芝普旅館、
住よし旅館、玉屋、大文字屋
大佛館、花芝大佛屋、大黒屋

旅館、千歳屋、月乃屋、奈良
ホテル、日之出、松利、公園
松利春日野茶寮、松島館、松
の家、三陽、三山旅館、大和
館、吉田屋の三十四軒であ
る。

★觀光都市に宿屋はつきも
のであるが、奈良には省線の
經營してゐる奈良ホテルは別
として、いゝ宿屋が少ない。
大多数は團體宿であつて、待
遇もあまりよくないといふ評

判である。昔は伊勢詣りの客
と、奈良の遊覽客とを、伊勢
の宿屋の番頭と奈良の宿屋の
番頭が相互に賣つたり買つた
りしたさうであるが、さうし
た餘弊が、悪名を流すに至つ
たのである。これは宿屋と宿
屋の話だけではない。仲夫や
案内人が宿屋や土産物屋とけ
つたくする。

五圓の泊り客を送つて一圓五
十錢も頭をハネるといふ始末
なので、宿屋は三圓五十錢の
待遇しかしない。土産物屋は
粗悪な品を押しつけることに
なる。迷惑なのは客ばかりで
ある。そこで奈良の宿屋は高
くて待遇が悪るいとか、土産
物に碌なものがないとか、散
々な悪評を聞く。これでは觀
光都市が次第にさびれてしま

ふと云うので、歴代の警察署
長がロキ狩といふのをやるそ
うであるが、根絶させること
は容易でないらしい。奈良で
は、さうした悪癖な行爲をロ
キと稱してゐる。

★奈良では宿屋で料理を兼
業にしてゐると、料理屋で
宿を兼業にしてゐるのがある
が前掲の旅館には料理を兼ね
てゐるのも含まれてゐるので
ある。

一流の料理屋としては月日亭
武藏野、菊水樓、新温泉、松
利等である。

★奈良の宿を川柳にした。

餅飯殿を旅のとどらと

いふ姿 霞 乃

學生さんの泊り座蒲團

など要らず 同

指定宿を出て墨を買ひ

筆を買ひ 路 郎

ゆびさすは三笠若草寮

長ホテル 同

奈良の宿鹿の土産を床

に置き 同

仲麻呂を思ふ月なり奈

良泊り 同

魚佐龜池を囿に客を

引き 同

餅飯殿(もちどの)は奈良唯
一の商店街、魚佐・龜池は猿
澤池畔の宿屋名である。
(奈良篇終り)



う・め・く・さ

浪花ぶしの稽古に、「なにが、な
にしてなあとやら」といふのへ、
ふしをつけてうなる。こんな調子の
いゝなだらかな文句を誰かはじめて
使ひ出したのか。素人でも矢張りこ
の「何が何して何んとやら」をうな
る。こんな文句は別に作者がある譯
でないから、天來のものといふこと
が出来やう。川柳も天來の名句かう
まれるほどの作家でありたいものだ
と思ふ。

○大阪の人間は、よく「そや〜」

といふ言葉を使ふ。岡本一平氏が、
かつてさうした言葉を使ふ人たちが
「ソヤ〜連」と稱してゐられたが
一寸面白い言葉だと思ふ。

この「そや〜」には二つの意味
がある。一平氏の「そや〜」は相
手方に同じる場合の「そや〜」で
あり、も一つの「そや〜」は物を
思ひ出した時に發する一種の感嘆詞
としての「そや〜」である。

○近ごろは郵便配達のリベルが、ウ
ンと下がつて、中學出の配達なんて
一人もゐないさうだ。あれでよく配
達が出来たものだと思ふ。さういふ
。 (尤も近來誤配が多いのは事實だ
が、考へやうによつてはこちらが神
經衰弱にかゝりさうだ。かつて三丁
ほど先のビルから出した東魚氏の「
はがき」が筑前の博多へ配達され、

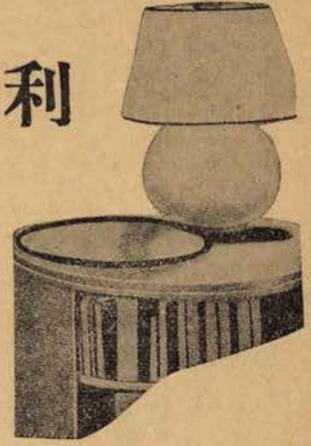
それが舞ひ戻つて来て、筑前橋の小
生のビルへ無事届いたことである。
霞乃がハワイの一浪氏に出した手紙
が、ニューヨークへ配達され、それ
が逆戻りしてハワイへ配達された
と云つて、その状態を同氏から送りか
へして來られたことがあつた。同じ
市内で一週間は二週間もして届いた
例もある。集會は遠くの昔にすんで
ゐて何んのためか案内か、くやし
がつたこともある。それにしても小
學教育だけで、達筆や悪筆や、誤字も
あらうによく配達が出来たものだ
おそれらくカンで配達してゐるのだらう

○小生は從來、郵便物に必ずこちら

の住所姓名をかゝることにしてゐた。
これは先方へ届かない時に戻して
もらへることを祈るだけであつた。
方が返事をかゝ場合、その郵便物が
すぐ住所録の代りになつて便宜であ
ると思ふからである。小生等のやう
な忙しいものにとつては、一々住所
録を引張り出して返事をかゝことは
たまらなく煩はしいので、誰でもそ
うして欲しいと思つてゐた。ところが
が性格的にそんな面倒なことはたへ
られないのか、雅號だけ書いて來る
人もある。ところが最近防諜關係か
ら、必ず差出人の住所姓名を書くこ
とになつたので大助である。防諜
關係上必要がなくなつても、これを
一つの習慣として實行して貰ひたい
と思ふ。(不死鳥)

犀利 縦横

一人一句評



俺とこの娘やるかと

伯父が来る (露斗)

岡山 鈴木 九坡

年ごろの娘を持つ現代の父親は恐らく誰でも斯う言ふ言葉を繰り返してゐることであらう。この伯父さんの表情は「冗談」と「眞實」、間のわるさ」と「威厳」さう言つたものが錯綜した複雑なものがあつたことと思はれる。しかもそこには父としての苦惱がほのかに表現され一種の悲哀さへも滲み出て居り、女性の結婚難をめぐる時局の生んだユーモアが軽妙に浮かび出てゐる。

二階借そんなに干す

なとも云へず (帆船)

大阪 大西 八歩

わづか四疊半一間で月十圓足らずの二階借、その金も延び勝ちなのへ面當ても手傳つて、下の女房は遠慮會釋もあらばこそ、シャツやズボンはまだいゝとしておむつから自分の腰のもの迄ずらりとひろげられては、それでなく共互の波に煙突のマス、沖の鷗は時々しのお故郷の夢の中、海のない港風景を害する事甚だしい。書棚へ並べた立身出世虎の巻、××押切帳も統制下の現在では利用價值全く零それでも國策に順應する意氣

丈は浪六位は持つてゐる。

正論を吐き隅つこの座へもどり (某人)

借りに来た嘘へ負けない嘘をつき (石鹿)

名月へ敵も夜襲を控へたか (松太樓)

大阪 石井白面人

むつかしい句が多くなつて来た中に、斯うした句もまた捨て難い別な魅力を感じさせられます。いづれも近頃好きな句の一つです。

日給を聞かれてピー

な形にまで技巧を導いて「な

あにていた事はございませ

んヨ」

度の強い眼鏡へ朝の

蝗飛び (久留美)

横濱 福田山雨樓

この句は聊かも主観的な表現をとつてゐない。事實を只あるがまゝに捉えてゐるに過ぎないやうである。かざり氣のない枯淡な姿を、ぼん」と其處へ放り出したと云つたやうな無技巧さである。それでゐてこの句は味はふべき詩があり、大牢の川柳味がある。それはこの句を通じて句主の偽らぬ、かざらぬ姿がその心と共に投げ出されてゐるからである。強い近視と朝の蝗とは何の因果関係もないけれどもそれをそののみを浮彫りさせた敘法に得も云はれぬ雅味があり、あるおどろきがこもつてゐる。更に落着いた諦観と云ふか心のゆとりと云つたものが含められてゐるのである。久留美氏は既に五十を越した老大家、しかも尙、颯爽として月々近詠を示されてゐる。その謹嚴な作句態度には自ら頭の下るものがある。自分は

この澄み切つた句を通じて、

氏の温容に親しく接して見た

寸談交々

不朽洞にて 葎 乃

★

「だけど、ルンペン根性でめられる程、世の中に強いものはないわね。

何んにも食べるものがなくなつたらヨハネのやうに蝗を捕つて食べてゐたらいいんだから」

「そんなら、あんたはあしたから蝗を食へとくなはれ」

「いくら私かて、私だけが蝗を食へるんだつたらいいや、同じ家根の下に暮してゐるんだから、私が蝗を食べたら、みんなも蝗を食へて貰はなければ」

「そ、そんなら私も蝗食べます」

★

「此頃みだいた時節ではトラピストへ這入りたいなんか云へないネ」

「そうよ、一人でも多く國家のために働かうとするのに」

「結局精神修養なんて云うものは平和時代の奢侈品だね」

★

「いよ、世の終りが近づいて来たネ」

「君は神様のやうにそんな事が豫言出来るかい」

「それや僕には出来ないさ然し地震とこゝろ／＼に起り、戦ひとこゝろ／＼に起る時は世の終りが近づいてゐる

いと念切なるものを感じた次第である。

平民の先祖は斬られ損だつた (瑞之介)

大阪 戸田 孤逢

鳥羽伏見の戦火が燃え上らうとする時、幾百年の傳統を誇る西陣は潰滅に瀕した。假死の状態が續いた。御一新の後死に切つてゐなかつた幹がら出た新しい芽が元の大木に蘇り、百年たつた今日又非常時局と云ふ斧に逢はんとしてゐる。

この句を單に斬り捨て御免にぶつつかつた先祖への淡いセンチメンタルに終らせたくないと思へるのは詠史眼から見たドグマだらうか。

百姓が好きな娘の紺がすり (露斗)

大阪 河野 夜王

輕薄に流れ易い都會の風潮にもあこがれず黙々と祖先の培ひし農村を護り自己の天職へいそむ乙女の姿が眼前に彷彿する。露斗氏の句を川雜に見ることすでに久しく十數年うますたゆまずの作句振りには常々敬意を表してゐる僕である。何の誇張もなくすらくとした句にしてそれで精練されてゐる。この娘の姿こ

そ露斗氏の姿であらう。

時雨の日いづこともなく嫁にゆき (丹路)

福知山 小畑自有浪

これは丹路さんだけの詩情ではない。年頃の娘を持つた人達のうづく様な感傷である。「嫁つた日の空は一生覚えられ」これは風竹さんの名吟だが、其折の空がからりと日本晴れ、いや布哇晴れだつたかも知れないから、吾々をロマシツクにもしてくれるが、丹路さんの場合は、どんよりとした時雨の日だから、賢次さんの名吟「お嫁さん義理で行くのか青白い」を感じ、センチメンタルに成らざるを得ない。

それが「義理で行く」と云うよりも、品物の様に運ばれて行く、宿命的な女の運命へ思ひを致す。作句者のあたゝかい感情が、そく／＼として吾々の身にも沁み渡つてくる様な句である。

赤ん坊のうごくをちつと見てあたり我になければ (おさむ)

大阪 須崎 豆秋

この句は啄木の詩想を多分に持つおさむ氏の試作であるからこそ光つてゐるのであ

るが、器用や好奇心で詩型を弄ぶのではなしに、腹の底から湧き出づる逞ましい情熱や詩想を、どうも十七字の容器に盛り切れんと思ふことあるならばたとへ二十字にならうと三十字にならうと構うたこととはない。大膽率直に個性をさらけ出した特殊川柳が少し位あつてもよろしいと思ふ。

ペンネーム僕にさみしい過去がある (萬的)

下關 櫻川 不水

確に同感。飄逸的な萬的君にしてこの内容あり。挑戦的な句を作りがちな私に平和を愛するあり、ピストルの如き亞鈍にして内氣なりと聞く。この句淡々たる内に何か胸を打つ所あるは、實感の賜なるべし。

水打つて佛心になつてゐる (八歩)

兵庫縣 奥村 丹路

手近の十一月號からこの句を推奨する。「佛心になつてゐる」が説明

に、無反省に使用されてゐるのに氣付いてゐるからである自分の作句上には勿論である「佛心になつてゐる」は一種の心境の説明ではあるが、「水打つて」の前提によつて生きて來てゐると思つた。淺薄な社會觀察句や獨善的な世相批評句や、時局便乗句や、には飽いて來てゐるので、特にこの句をとりあげた。

應接へ不幸な人を迎へ入れ (丹路)

天津 鈴木 石鹿

しみじみとした温い人の情がにじみ出てゐるので好きな句です。たゞ迎へ入れられた「不幸な人」が所謂不幸續きの不幸な人か或は不遇とか失意の人か、ちと明かでない様ですが、それらをひつくるめたものと見るよりは不遇な人と見たい。何れにしても句主の人格が光つてゐます。

共々に明日は散る身のかくし藝 (美知夫)

奉天 吉田 水車

路郎師の御高評のあつた句ですから甚だ蛇足になつて恐縮です。前線作家は技巧に饒え銃後の作家は實感に缺乏してゐると言ふ事が言はれて居ますが、すら／＼と詠まれた

んだとちやんとバイブルに書いてあるよ」

「そんなことが當てになるもんか」

「まあ考へて見給へ、今に全世界の人々は「あゝ戦ひはいつまで續くんだらう」と彈丸の音に倦き／＼して終ふ時が來るよ、其時だね、若し宇宙を支配する全智全能の權威者が現れたと假定し給へそれがつまりキリストの再來なんだよ、まあ芝居で云へば儒役といふところだね」

「五匹ともまた嫁入先がおまへんのとどねなとお氣に入つたのを持つて歸つて下はれ」

「それが鼠を捕らないか知ら」

「うちの親猫は毎晩のやうに鼠を捕りましてな、家の中に鼠があんないやうになると溝の中の鼠までくわえて來ますよつて、仔猫も皆鼠を捕りますやろと思ひまつけど、頭すしをかうつまんで、上げますと、なそれ此猫みたいに後脚をだらりと伸ばしてゐるのは、鼠をようとらんさうでんがなア」

「そんなら私を預きますわ」

「喫さん、おんなじ貰ひはるんだしたら鼠をよう捕るのになはつたらどうだす」

「私鼠の死骸を見るのが嫌ひですのだから鼠を捕らない猫かい、んですわ、それに鼠を捕らなくても猫が居れば鼠は家にあなくなりませうからね」

「ほんなら、それに決めはりまつ

か」

かに見える此句の作句過程に容易ならぬものが看取出来ま

ふるさとが近し眼鏡の玉を拭く(豆萩)

岡山 逸見 灯竿

憧れの故郷を附近に、萬感を胸に秘めながら、眼鏡の玉を拭清める若人の姿が目に見えるやうだ。網棚の荷物は既に下されてゐる。カタ／＼と軋る汽車の音さへ聞えて来るやうだ。何と情趣に富んだ句であらう。形式的に見て「玉をふく」と終止形で止めたところに此の句を情趣に富ました所以がある。若し之を連用形で止めたとしたら幾分趣が減殺されるであらう。上の「が」といふ助詞へ「近し」といふ文語の形容詞の終止形を接続したところに稍々難がないでもない。

子が泣けば泣いたて又も内輪揉め(平人)

下關 多田市多樓

平人氏は新人であると思ふ。氏が此の句をものしたのは實感其のまゝで、其の内輪もめの一人である様である。女にはあまりに用事が多過ぎる。

子供を育てる母には休養と言ふ事がない。子供は泣くのも一つの仕事である。然し子供が泣くと其の小言は育てる母親へ行く。斯うした内輪もめはよく見る事である。

停年の辭表も書けば手がふるへ(山雨樓)

大阪 戸倉 普天

此句の作者は御目にかゝつた事はないが多情多恨の青年期を過ぎた御健吟家と想ふ。そうでなければ斯様な達者な句は作れないと思はれる。病氣の爲めの辭表だつて、其れと書くのに妙な感じがするのである。況んや停年退職は初めから豫期してゐてもさて愈引退となると彼れも思ひこれも考へて異様の感のあるのは凡人の常であらう。人情のこまかな處も穿つて警妙である私は此句に満腔の敬意を拂ひたい。

迷彩てなし脳病院の赤い屋根(綠葉)

兵庫縣 水谷 鮎美

上七にこの句の強調さがある。はつきりと言ひきつてゐる丈けに餘韻はないが、然し

寫生句としては成巧の方である。主觀的に患者の部屋の一つ一つを覗いてゆく手法はむしろこの場合としては悲哀である。覗いて作つた一句はあるひは胸を打つものがあるかも知れないがそれは常套な句として残るだけだと思ふ。殻を脱した一句をこそ望ましいのである。こう思ひ比べて見ると確かにこの句の心境が味はれてくる。句は淡彩にして老巧、直ほ作句態度の冷靜さも見逃がせない。時局柄忘れられてゐるこの方面の視野をこの句によつて擴げ、川柳に依つて慈光を浴びせてゐるのも句主の善人姿と言へるでせう。

佛印かり満か支那か生きてるか(山川見)

堺 麻生 茂乃

第一線にある子を思ふ親の心情が素直に表現されてゐて、飾らず、街らはざるところに切實感が盛られてゐる。而も其調子は各齣の終りがあ列で止めてあるために、讀んでゐる者の耳へ、非常になだらかな輕味を傳へて来る。川柳は唯、世を皮肉くるばかりが役柄ではない。かうした心情の表れた句も路郎が常に説いてゐる人間陶冶の詩として尊いものであると思ふ。

川・柳・書・架(78)

明窓獨語

村田周魚 著

▼著者の序文によれば「この本は川柳を中心とした私の雜筆で、昭和十一年一月からの川柳きやり」に載せたものをあつめたものです」云々
▼昭和十六年十一月十七日發行、B列6號判 二九〇頁 眞定價一圓七拾錢
東京市豊島區高田本町三丁目一四五九番地川柳きやり吟社發行。
▼著者村田周魚氏は「川柳きやり」の主幹である。氏は序文の中に凡俗を好く私といふ言葉を用ひてゐるが圓滿無碍な常識人の氏にして云ひ得る言葉かも知れない。多少のお上手と樂屋落記事がないでもないが、大體隣人に話さうに書かれた難筆だ。

「え、それを貰ひますわ、猫があると蜘蛛があなくなるので私大助かりですの」

「奥さんは蜘蛛がお嫌ひだったか」

「蜘蛛の姿を見ると身がぞつとしますの、眞夏の蜘蛛は家の中へ這入つて来ませんけど、八月の二十日前後からそろ／＼家へ這入つて来て十一月の初め頃までは、とても安心が出来ませんの、以前飼つてました猫は蜘蛛でも、油虫でも蝶々でも蜂でも蜻蛉でも何んでも捕つて食へましたわ、其中でも蜻蛉が一番おいしうに食へてましたよ、蜻蛉の頭から觸へかけての肉はひきしまつて、丁度伊勢海老の身をつくりですから、きつと私たちが食へたつておいしいだらうと思ひますわ」

「奥さんは蜘蛛よけに猫を飼ひはりまんのなんな」

「え、そうなのよ、わたし蚊帳をつるんだつてほんとの事を云へば、蜘蛛よけに居るんですよ、私時々御便所へ行く夢を見る事があるんですよ、そんな時に限つてきつと壁に片手をいつはひ擴げたやうな家蜘蛛が炯々と眼を光らせてるのにきまつてますの、怖しくてお便所をせすに又外の御便所を見付けて戸を開けるとこんどは戸の裏に二三匹ボロ／＼這ひ廻つてますの」

「へえ、蜘蛛があんならばばかりへ這入つてはりまんな、それこそ大騒動だんがな」

「ほんとに、その時だけは蜘蛛のおかけなんですよ」

塔柳川



=選郎路=

兵庫縣 奥村丹路

葉書一枚生きておたかと笑ふなり
どしや降りになつていよ／＼あほな顔

戀すてふあゝ古き日のいゝ言葉
としよりの話おひ／＼苦にならず
無駄多き日なりし妻に迎へられ

近衛公挂冠の日

近衛公すなはち「夢」と書きのこし

張家口 岩崎柳路

始末書へ悔し涙で座す女
死美人の様な姿で夢で来た

分前は三分の一でけりがつき
悪女の身柄引請させられた
大陸で國民服の父と會ひ

故國を案するロシア人

ウオツカで白系モスクワ氣にして居

戸屋寺 井銳々

ネクタイもカラも汚れて資産家で

就職の通知ツボンに鑑當てる

マントふか／＼と着てゐて風邪を引き

大阪 戸田孤篷

大阪 石井白面人

おあいそに經濟市況かけてくれ
インチキの萬策つきて死に別れ
るいれきのあとは白粉ぬつてゐず
げて物にハハン／＼と遺品展
スローモーションあゝあまりにも科學的

呉服部で歸りかけたり戻つたり
本代のことば兄弟午後も揉め
欲しいもの云はせば子供侮れず
叱られて買うて歸へるに客も慣れ
街頭所見
あるものと知れ、ば炭の山が出来
アメリカ

ステツキへ犬逃げ腰になつて吠え
立つて、も二等車だと云ふ顔でゆれ
俵せを引つさらえ末の子は眠り

大阪 中島生々庵

K君海兵入學を祝ひて
颯爽と太平洋へ君一步

義弟の皇族御附武官へ榮轉

恩命に一族共がはれわたり
お悔みしどろ俺にも父がなく
持つてみて赤帽米だナと思ひ
こむ電車國民服がのさばつて
立つてまで二等車に乗る見榮か君
門構へ我儘な兒を育ててる

兵庫縣川西町 戸倉普天

肺炎の因をただせばもらひ風呂呂
劍道五段うるしには参り
うわ言で云うた云わんが因とかや

福知山 小畑自有浪

軍需景氣娘を嬢と呼ぼしたり

有りつ丈けの陽をあつめたり冬の土

兵庫縣 水谷 鮎美
大阪 橋本 綠雨

紋付の慶弔らしくない女

喫茶店辭める話を續けて居

買物の列で泣く子が叱られる

大阪 高橋かほる

夜間飛行彼と彼の女に見上げられ

ミシン屋を呼ぶアパートの二階から

横濱 福田山雨樓

舂から土へ子供をつまみあげ

大獅子吼聞けず遠巻して戻り

丸刈の林房雄が維新説く

引越の手傳枝に柿一つ

交又點を恩師あはて、過ぎ給ひ

舊友の海渡りゆく面構え

西宮 阿萬萬的

やぐら炬燵世事には遠い話する

上林温泉にて

散歩道二人へ丁度いゝ廣さ

大阪 谷川 綠風

お茶づけですませる友と長話

友人結婚

新家庭君ももらへと仲がよい

尼崎 小林 文月

樂隊に合はぬ選手がトツブ切り

乙女ダンス昨日の給仕とは見えす

孫悟空の繪本齒科醫で半分讀み

某邸使はぬ門に金をかけ

薪炭車小火かと思ふ煙を上げ

伊丹市 酒井美知夫

より道へチト邪魔になる薬瓶
食料品部編物をして順を待ち
満員のバスを見送る十二月

大阪 小川 恒明

姉ちやんと呼ばせて歩く母であり

兵役を問はれ小さく首を振る

しとやかさお菓子之列で見破られ

大阪 浪 玲之介

賽コロが飯屋の門に落ちて居た

素人でよし道樂もこゝらへん

三味持てば乞食も舊體制に見え

男兒志を立て、歸農する

言うたらあかんらしい意見をもてあまし

大阪 津路 紅多呂

百姓に濟まぬ氣持で道を開き

法隆寺にて

子規の句を讀んで私も柿をむき

大阪 河野 夜王

器用な繪男の子ゆへほめず置く

隣組長飯の炊き方聞いて來る

奉天 吉田 水車

科學する夕もありて隣組

來滿半歳馬糞のにはひにも馴れて

大阪 妹尾 八九滿

隣組犬も仲よく子を産めり

歸省して

松林十年前を語り合ひ

東條首相へ

一億の待つてる夜明け近づけり

大阪 須崎 豆秋

大根を提げて大阪驛で降り
カステラへ蟻の眞似して列ぶなり

墨をするのも久し振り明治節

丙種(二句)

これからは頭搔かいていゝ丙種
氣の早い丙種支那語の本を買ひ

起き伏しに輕き讀物揃うたか

燈火管制下

燈管に針運ぶ手の揃ふ家

町會長の思ひ出(二句)

債券となればお金が無いと逃げ
會長も矢張りお米は入るものを

警防團より視たる防空訓練(二句)

説明を聴かず電燈消しちまひ
警報も顔負けをする早寝也

司法保護に當りて(二句)

身を隠くす様に前科の家を訪ひ
要保護者ジャンヴァルジャンを知つて居る

志賀高原を歩く

立つてゆく覺悟夜汽車へ月が冴え
夜が明けてきて夜汽車みな他人めき

草津温泉へ

案外に地味な草津をみて通り

峠路は信濃の山のかすむとこ

山 路

舊道をゆけば茶店の戸をたてゝ
里 近く

手打そば菊の香のする椽により

商賣の一つ保険屋珠數を持ち

子連れて日本へ歸る荷をまとめ

世辭と云ふ淋しいものを心得て

松木 石曾根民郎

西宮原 史風

大阪 正本水客

大阪 丸尾潮花

詩や歌が好きで十九の夢をもち
家の事ばかり氣にして旅する身

神戸岡田某人

その列を八百屋じろりと眼ではかり

松陰は出すやと思ふ風の夜
買ひはぐれた顔でやつぱり死にもせず

肚きめて話せば太い聲となり

掌を合はすほどの陽があり稻の出来

名利のけふ巻尺で計られる

尼崎 酒井斗風

孤獨にもなれずコーヒー呑みに出る

電話にも弱者の聲はほそくなり

貧に耐ゆ唯だそれだけの男也

紹介所老ひのひとみが哀れ也

大阪 北川春巢

お妾が智慧借りにくる隣組

兒の着物日本趣味の夫婦なる

物干の狭さおむつの數で云ひ

故郷へ錦借ある家が死に絶えて

管制下學者氣質は讀み続け

煙草屋もひどいと思ふ値上なり

下關 櫻川不水

人間をやめたら肩の荷が下りよ

二三枚ねち込んで出る茶つ葉服

買ひ溜めの誇むらゝ聞いてやり

末吉を大事に終ふ不倅な娘

矢張り金怨嗟の中で巾がきゝ

滿洲東京 中原銃人

秋草の繁きを行けば軍馬の墓

故里の話は止そうじやないか戦友

二人・三人・四人が吸つた煙草一本

白衣でゐれば二十四時間のながき

入 院

廣島濱田久米雄

云分があり内職の手を休め
勤め先をはつきり云へる身を感じ
もの云はぬ一とき勤勞奉仕班
煙草屋でその後光が賣れ残り

大阪魚住滿潮

十二月オツチヨコチヨイにされておき
待たされて部屋の時計のいゝ音色

十二月チャツカリしてゐる人に會ひ
漫才の手でごまかせぬ十二月

大阪中内翠芳

二時間も立つて野菜を十二錢
秋晴れを謳つて行くよハイキング

下關多田市多樓

財産はないけど障子眞白い
さりげなく負けて歸つたのが博士

防空訓練雜感

空襲へ利己主義個人主義は捨て
燒夷戦少し慌たバケツの音

岡山鈴木九坡

猫ぐるまカラコロ秋の音を立て
國民服素性隠した顔で来る
床の間の名刀平和なひとゝきよ

岡山逸見灯竿

散るものは散れよ自然も亦よろし
モンベいで来て見る菊の嚴めしさ
黒板へ昨日の旅の字が疲れ

藤野水恵女史の勳八等を記して

勳八等親を教へて子を教へ
大根を供へ寫眞を拜みけり
教職へ靴の重き歳が來し

大阪夷

一笑

もらひ風呂湯ざめせぬ間にいぬと云ふ

呼び止めた花屋に門をよごされる
十二月いつそ河豚でも食べてやろ
こちらから訪ふ氣になつた十二月
明き書はいろはの順と知らなんだ

大津鈴木石鹿

從妹A子結婚(三句)

寫眞師はモソツトと寄り添はせ

仲人は先づ時局より説き始め

披露宴昔なら昔ならと語り合ひ

モンベいの舞妓梯子の上に立ち

食慾へ本日賣切申候

家計簿の殘高春の雪に似て

米國へ寄す

此劫は必死の劫と知れよかし

姫路陸軍病院にて

戦友の目となり手となり足となり

今治

月原宵明

遅刻した言譯もせず咽喉を巻き

青壯年登録袖カパー付けたまゝ

十一月某日刑事室の菊

避病舎のボツンとあつて秋の涯

警官と並び氣まずい汽車の旅

朋友相信じてやまぬ河豚料理

國の爲何時でも志士になるつもり

大津田抱逸

獨り身の哀れよく似た旅鳥

産聲へ回覽板が立ちどまり

沿線の朝鮮部落の灯があかい

これ以上問へば慰問もスパイめき

下關國弘半休

ビル街の雑音

後藤田凡生

潔癖症も度がすぎると、一種のユーモア味がたじよふものだ。

近頃僕の家の近くに、獨り者の五十恰好の婦人が引越して来た。交際嫌ひと見へて、餘り附近の人達とは口をきかないが、隣組の關係から母親とは、ちよい／＼世間話をするやうに、ときには家へも遊びに来る。だが奇妙なことには、いつも新聞紙を持つてくる、そしてさも汚ならしげに、それを疊の上に敷きその上に小さくなつて座るのである。座蒲團は護らすゝめても敷かない。歸るときには丁寧に新聞紙でもつて、そつと恐そつと戸を押へるやうにして行くのである。勿論這入つてくる時も同様である。

こゝろ言ふと、さも僕の家が不潔であるやうだが、勿論茅家ではあるが、何も新聞紙を敷かねば入つてもらへないやうな家ではないつもりである。犬小屋や豚小屋ではないのである。それに何んぞや、わざわざ新聞紙を持つて……實に侮辱も甚だしい！言語道斷である。

そこで僕は母親に言つた。「人を侮辱するに程がある。斷然交際はやめて頂きたい。」第一母親が先方の家を訪れても、戸口で應接して絶対に家のなかへ入れない。



(十一) 六朝史

諸葛孔明

太公望といひ、諸葛孔明といひ偉い人には宣傳は不要、御主人自らお迎ひだ。たゞ將に將たるの器だけが將を使ひこなせるので凡主にかはるとザンナイものだ。軍律を犯した親友馬稷を切つたり、卑怯な敵將司馬仲達に女着を送つていましめたり、死んだ魂が生ける仲達を走らせたり。今度目も孔明ねはつてみるつもり

苜盧三顧地龜が今日もないてゐる

墨石展出師の表を床にかけ合掌で將軍馬稷斬るときめ

仲達はその臆病を肯定し

川柳 史界世

(X)

戸田孤蓬

清談

日本に方丈記といふものがある。あさましい浮世をいつて籤蚊にたかられながら實行力のない議論を戦はせて有卦に入つてゐた。竹村の七賢人等の一群がそれである。

遺言にすまじきものは宮仕へ

竹林は今日も清談だけですみ

南北朝

支那四千年史は南北抗争の繰返し、ことにこの百五十年間は極端な廢袂篡奪の歴史。

異民族との文化交流が之に加はつて唐の華を開かず陣痛は加速度を加へる。

宿業の王子が一人又産れ

六朝文化

戰爭に勝つのは北狄。文化の勝利にほくそ笑むのは中華の漢人。詩人陶淵明、畫家顧愷之、書家王羲之等が隋唐文化に先立つて輩出する。

月給が俺の膝を折れと云ふ
讀めぬのも王羲之とき、立どまり

無常なる世相は佛敎道教の普及に推進力を與へる。大同石佛が出来たのもこの時代
長生きが出来るといはれ拜みに來

(十二) 隋史

煬帝

大運河を作つた事と日支最初の公式交通が開けた事で隋は我々に記憶されてゐる。そのいづれもの當事者になつたのが煬帝といふ冥加につきた罰あたり。

隋を起した文帝と云ふのは相當の人物。奢侈の故を以て長子を廢し、その後益に坐つた次子と云ふのが兄貴以上の放蕩息子だつたとはよく／＼子供運の悪い人、次子煬帝は地獄の責苦に逢ふまでもなく

自分の護衛兵に絞め殺されてゐる。それでも感心に聖德太子の「日没處の天子」に憤慨しただけで高向玄理その他の留學生の滞在まで許したのは天を懼れたのか地を畏れたのか。

一生の不覺長子に難をつけ煬帝は日出る國をまぶしがり
出馬には答へず煬帝たゞふるへ
「わらはがどうか」いはせぬ先に首が飛び
一對一煬帝はたゞ泣くはかり
柳の芽礎石の上を吹くやをら

(十三) 唐史

高祖と太宗

煬帝が衛兵の手にかゝつて殺した頃、長安の都を陥れ、隋の禪讓によつて帝位についたのが李淵で唐の高祖、その子の李世民が太宗である。おきまりの善政を行ひ貞觀の治



いのである。その理由が家かよれるといふのである。併し、いよ／＼塵敷へ通さなければならぬ時は、座蒲團の上へ新聞紙を敷いて、その上へ座らすのである。客が歸つた後は、サア大變！大急ぎで雑巾で何遍も拭き浄める。全く開いた口が塞がらない。

だから最初は母親も餘りのことに憤慨したが、やがてそれが潔癖症の重患であることが判り、反つて可笑しくなつたさうだ。これを聞いて僕も一緒に嘔き出してしまつたのである。凡てがこの調子である。だから縫つたまゝ未だ手を通さない着物を人一倍持つてゐながら、汚れるからといつて、縮目も判らない位にかけたのを着てゐる。

これは一日に二度着替へて洗濯するからさうだ、この人の一番の苦手は毎日の買物で、雑踏する市場の中で、新聞紙片手に（この際の新報紙は他人が自分の身體にふれた所を拭くのと、人をはげるのに用ふのである）ひらりひらりと體をかわしながら買物する苦心は、全く命が縮むと會ふたび毎にこぼすのである。

併しどんな難癖の人でも、屹度何處かに間が抜けたところがある如く、この人にもそれがあるから可笑しくなる。第一この人が考へてゐるやうに、新聞紙がそれ程キレイなものと思へれないし、それに便所へ行つても絶対に手を洗はず、拭いて置くだけといふから、矛盾も甚だしい。も一つは目下再婚すべく適當の人を物色中といふから笑ひたくなる。

と稱せられた。太宗は四方八方へ外征を試み、そのいづれにも成功した。遣唐使一四つの舟が盛んに日支間を往き來したのもこの時代。

長安にチベツト料理の店が出来

武章の亂

女傑則天武后の話。先帝に心中立てをして比丘尼になつてゐたのが子と名のつく高宗の後宮へ移し植へられ皇帝を骨抜きにしてしまつたと名實ともに則天武后が出来上り老病で動けなくなるまで頑張つた。

聖琴の譜を出し還俗する

きめ
人生八十未だに俗をすて切らず
則天武后に蹴落された中宗へやさしい慰めの言葉をかけてゐたはずの皇后は夫を帝位に復活させると藍は藍より出でて藍より青く中宗を毒殺するところまで尻に敷きつゞける。

碁の掃除させられ皇帝考へる

玄宗と楊貴妃
最愛の皇后武惠妃を失ふま

で玄宗は小さな過失もない名君であつた。掌中の玉の身代りを人もあらうに王子壽王の妃に見つけ出したとは。あとに例によつて例の如き後宮生活。飲む奴でも打つ奴でも一門とあらば宰相の印綬を帯びさせる。たゞれた宴を白樂天にうたはせたり、大層な南洋の珍果荔枝でも妃の希みとあらば民の苦勞もいとはず、うっかり帝兄寧王の笛を吹いて愛情をうたがはれかけるとブツツリ黒髪を断つて見せる。

玄宗は玄宗で後宮二千九百九十九人にはスクンで手も出せない。武章の様に政治的野心はなかつたが附け届けをして來るものは手玉にとるその一人に安祿山が居つた夷狄の血は夷狄らしく義理人情もなく叛逆の徒と化する唐の社稷を守らんとする忠臣達も楊貴妃

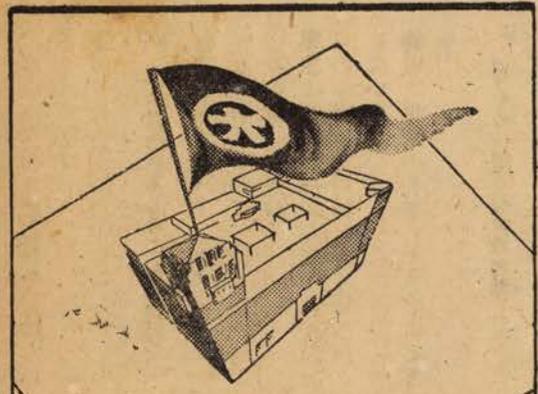
頭で唐の勅使を突つかへす宿命のつきはて吊てくびられる
邪又また邪又によつて切られたり
國が何だ朕は失戀してゐるぞ

唐の滅亡

安祿山の亂に力を貸した回紇が何んとかかんとか文句を云ひはじめ、それが元で唐のはとう／＼投げ出してしまふ。

白骨の御文の様に唐は消え

(續)



輸送力確保の國策に副つて
お買物には風呂敷を



大丸
大丸心算帳
月曜休
大丸心算帳

武玉川四編研究 (二五)

梅 本 塵 山
森 東 魚
蛭 子 省 二

(587) 清もせず羽折のかへる藤の花

省二 藤は三月の季のもの、藤の花見にゆき、羽織をきる要もない温さであつたのだ。

東魚 單羽織で大當りと同じ心持ち。これは夕方の小寒さを思つて供に持たしてやつた羽織が、其儘手を通さず持戻つた場合。

塵山 初夏の節に近い故、羽織も必要でないであらう

(588) 根を焼て遣るも牡丹の迷也

省二 牡丹などは、その根をやいて置けば、多少長くもつもの。然しどつちにしても大差はないのだが、牡丹の美しさに對しての迷ひだといふのである。

東魚 美しいものを一日でも長く楽しみたといふ心持ち、それも畢竟は迷だといふのであらう。

塵山 「遣る」は、他家へ贈るといふ意ではなからう歟。「迷也」の意が判然しない。

省二 他家に贈る場合に、根を焼

いてやる。自家栽培の牡丹の美しさを觀賞して貰らひたいのである。

(589) いろくへ映る袖かかうやく

省二 袖のはげしい労働振りが窺はれる。

東魚 肩だの、腰だの色々にはる塵山 大小、横堅にはるのであらう。

(590) 養生過て減ぬらうそく

省二 専心養生の有様が窺はれる。

東魚 風にも當てぬ心持もあらうか。

塵山 風にも當てぬとの意が含んで居ると思ふ。

(591) 引込思案竹に見とれる

省二 引込思案にくれては、竹にみとれる。(私も病間、往々茫然として竹にみとれるのである)。竹は他の花などと異なつた感じを與へる。

東魚 竹の潑刺と伸びるのに對し

て、自分の因循さを省みた心持ちがあるやうに思ふ。

(592) 塵山 處士の閑居の態らしい。

二ノ替内ハ淋しきこたつの火

省二 顔見世がすんで、二ノ替狂言が演ぜられるのに、内では炬燵で留守番の淋しい面持ち。

東魚 春狂言がすんでの二の替で二月の春淋しい炬燵に留守居の淋しみを描いたもの。

塵山 留守居のはした女悲哀を感じる。

(593) さくらへ繋ぐ替女の大聲

省二 この替女は、聊か酔つて居るのであらう。男の生醉なら「亂に及んで縛られる花の山」だ。

東魚 替女の酔つたのである。

塵山 櫻樹の幹に縛つたのではなく、替女が櫻の下で大聲に唄を歌つたのであらう。「心を繋ぐ」などと云つて、無形のもの繋ぐと云ふ例もある。

省二 女だから縛られるといふ事は、勿論ない。櫻の下に坐らせられるのである。

(594) 晝から顔の寒い律僧

省二 戒律を最も嚴格に守る律宗僧だ。晝みてさへも枯木寒嚴の風貌である。——唐の鑑真により我邦に弘まる。小乗性の教ではあるが大乗

精神はある。律的の僧侶などは現代に求めて得られないだらう。

東魚 「晝から」は、晝から既にの意。

塵山 律僧は日常粗衣粗食で、戒律が峻嚴なのである。

(595) 十文を隠す娘の足袋

省二 「嫂」であつて句に興あり。現代の女學生などと異り、昔の女の十文は大きかつたので、恥かしく感じたのである。

東魚 嫂で、家にまだ年頃の妹がゐる事が想像される。その妹に對して恥しい心持ち。

塵山 女子の足は見好いものでない。これを隠すのは當然である。

(596) 珊瑚珠の心明るき五月團

省二 珊瑚珠の光澤と五月團との對照文けではなからうが、珊瑚珠がすがすがしい感じを與へる。

東魚 食膳の毒氣などに觸れると珊瑚珠は直に割れると云ふ。さう云ふ趣きが、うかどはれるやうに考へられる。

塵山 私には不可解の句である。

(597) 富士を呑込やうな夕陽

省二 大きいねらいどころだ。落陽と俱に富士もみえなくなるのを、呑込むやうにと云つたのではないか。夕陽無限好唯は黄昏近。

東魚Ⅱ夕方の大景は思はれるが、「やうな」との句法に、何か満足し兼ねる。
塵山Ⅱ雄大な句であるけれども、「吞込やうな夕陽」と云ふのが腑に落ちない。

(598) 狭い小原に山伏の公事

省Ⅱ山城の大原。狭い地域で四面山だ。かゝる村にも山伏の公事があるとは。(なにか事實ありや)。
東魚Ⅱどうも十分合點が行かない。静な小原の里に、もの／＼しい山伏の公事沙汰と云ふものを對照させたのかと思ふが。

塵山Ⅱ別に故事は無からう。
省Ⅱ國府臺とも書く。景趣眺望佳し。一日の郊外行に値ひしたのだ。草臥れて歩き来たつた道を眺めて

(599) 草臥た道を見て居鴻の臺

居る。「柳樽」には中七が「あとを見て居」とある。
東魚Ⅱ本所から鴻の臺への路は、全く一直線と云ふてもよい。遙に來た道を眺めやる事が出来る。
塵山Ⅱ一路如線、兩脚如棒か。

(600) 行者の手柄並て出て行

省Ⅱ行者に占つて貰らつたのか。「手柄」とあるから行者が祈禱したのだらう。
東魚Ⅱ祈禱の力で憑きものが落ちて、泣いて出てゆくのではないか。
塵山Ⅱ狐憑に相違ないが、有難涙はどう歎と思ふ。

省Ⅱ感涙。感激し神経のたかぶりだらう。
(601) 時行風四人おとこと也にけり

省Ⅱ五人男は普通にいふ洒落としてよい。一人が時行の感胃に罹つて、四人男で歩いて行く。(此句意を突き進めて、風邪で遂に死去した場合に解しては如何、西鶴物などに、はやり風で果てる話もあるから)。
東魚Ⅱ盛り場を押し廻はる五人組の一人が、流行風邪でねて、今日は顔が揃はないナと云ふ場合。
塵山Ⅱ死亡まで考へなくも可ならむ。

(602) 鶉か吞込んで橋の隙あけ

省Ⅱ橋上から見物して居る。鶉が吞込んだので、一寸人が散る。「隙あけ」はヒマあけとよむ。(丈艸に「隙明や蚤の出てゆく耳の穴」)。
東魚Ⅱ作り過ぎた句の様に思ふ。
鶉飼は夜であるから、隙のない程橋上に見物のある事はどうか。涼みがてらの見物が橋上に大勢ゐるのであらうか。

(603) 浅間と聞て駕の戸を明

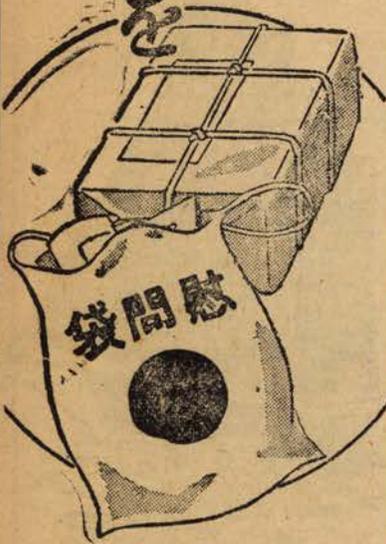
省Ⅱ浅間の噴煙が見えだしたと聞き、駕の戸をあける。
東魚Ⅱ煙り立つと音にきいた、それを目の當り見ようと心急ぐ思ひである。
塵山Ⅱ現今ならば汽車の窓。

(604) 鶉の抱れて通る朝かす

省Ⅱ春の朝、おとなしく鶉が抱かれてゆく。鶉は鬨つて強い。鶉鬨にゆく場合と見做しては如何。
東魚Ⅱ鶉合せは俳諧で春季と思ふ。鬨鶉に行く場合と考へてよいと思ふ。
塵山Ⅱ何となくのびやかな句である。

戦線の將士へ
白衣の勇士へ

慰問品を



慰問品賣場一階



實用百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

樽柳作近

選郎路



バスガール蘇州夜曲でバス洗ふ 和歌山 田島破鼓
 マスゲーム始まる前の海行かば 同
 汐くさい町の三味線しやがれ聲 同
 別室は相手を五分に見ぬ夫人 同
 訓といふ活字銃後の昨日今日 同
 列全部背柱の判る汗が行く 同
 陳情者この官吏めと思へども 兵庫縣 谷口寒草
 石油がほしいと世界地圖をみる 同
 一瞥はたしかにくれた女事務 同
 貧乏を賣物にして貰ふ嫁 同
 嫁ぎきて此の日曜日菊を活け 同
 新入の看護婦お好み焼きが好き 神戸 平川久枝
 約束がない公休日足袋をつぎ 同
 看護婦に朝の寒さを教へられ 同
 眼帯で朝の舗道のすみをゆき 同
 光榮に大和の秋は空高し 同
 人間といふものヒヨコもう知つて 和歌山 秋月宏方
 東條内閣成る 同
 大臣を今日も運んだ参宮車 同
 散髪屋はげてゐるなと思ひつゝ 同

學歴はもうこの椅子へ座らせる 同
 驛前を煙で巻いた木炭車 松江 本庄快哉
 故障車に車掌成程世帯めき 同
 ちと強い地震に交番立ち上り 同
 見學はマスクして來る寒稽古 同
 ときたまに子供の顔になる社長 中 奈都里天歩
 お嬢様心に就職してみたし 同
 月の夜を一人海賊本を読み 同
 氣短かさ常に辭表の用意あり 同
 熊に似てプラツトを往き來する人ぞ 大阪 八竹正柳
 斯くすればよかつたことの多い過去 同
 子守りしてベッティブーブを書き覚え 同
 芋掘りに君に似たのが出たと云ふ 同
 手術臺信する友の一人居て 西宮 谷口綠葉
 いやいやは嫌にはつきり言へる兒よ 同
 男子出産(二句) 同
 防空へ吾子の生命を一つ得て 同
 生れしは鼻だけ似たる男の子 同
 日の丸の下大陸の秋平和 中 高山武士
 一點の差もサイレンはけたたましい 同

物語

仁徳天皇

去る五月多年の計畫たつた出版をやる事にきめて、さて何で烽火をあげるか、腰すに考へたが三日目の夜の白々と明ける頃、ふと仁徳天皇!! と浮んだ。私の血潮は湧きたつたが之は獨り私のみの感激ではなからうと思ふのである。聖帝のまつりごとを一億民衆に平易に傳へる事はむしろ臣民としての義務である。幸ひに著者の人格と云ひ、又之の著の内容と云ひ、私に充分の満足を與へてくれた、故に信念を以て天下に推薦出來ると思ふ。

田中秀吉敬白
 定價一・七〇

最新刊 近刊

- 松梅 岡金池 來
- 波田 野・田年
- 次雲 清物・小の
- 郎演 豪心 菊春

全國書房

大阪・末吉橋
 振替大阪四二八七番



人相で旅館すげなく断はられ
 エレベエータ中食だけの客を乗せ
 忙しいのかツツケンドンな都會人 大阪 橋本美奈子
 よごれてはゐるが乞食は純綿だ
 同 同
 娘等笑う五色の波のうねる如
 同 同
 話下手女房しきりと炭をつぎ
 同 同
 家庭園藝十時頃からボツ／＼出 大阪 松浦帆船
 失戀へ仕事はうんとたまつてゐ
 同 同
 素人の悲しさ客をまた逃し
 同 同
 鈴成りの柿を見上げて小休止 大阪 南 要兒
 同 同
 亂れ咲く菊が拒んだ突撃路
 同 同
 水すまし顔を洗ふぞのいて呉れ
 同 同
 かん立てゝ電話をかける十二月 大阪 富岡巨人
 獨身を訪へば蒲團を片付ける
 同 同
 蒙疆神社鎮座祭
 長城へ祭の夜の灯が赤い北支宇敷桃水
 同 同
 ○○方面へ轉屬の戰友へ
 榮轉へ殊更菊が香るなり
 同 同
 蔣介石へ
 廢物の張學良へ氣をつかい
 同 同
 内職で宅には恥をかゝさぬ氣 大阪 榎岡詩朗
 藝妓らに社長電話で呼び出され
 同 同
 腰障子座敷が見える子澤山
 同 同
 早婚多産貯蓄三種の身も多忙 廣島 朝邊士農夫
 あゝそうか課長の場合それですみ
 同 同
 働けそうな乞食へ敵意感じたり
 同 同
 愛犬が女中に懐き妬ける妻 大阪 有馬千斗
 抽斗に馬事通信を庶務課長
 同 同
 泡盛のお剩錢落してつまみかね
 同 同
 情緒なき手紙女醫專へ行つてます 岡山 本田ユリエ
 同 同
 自給自足綿の花咲く低き丘
 同 同
 懸崖の菊が見事な靴の店
 同 同

企業合同それで貴夫はどうなるの 愛媛縣 木村棟友
 前身は豆腐屋さんとは見えません
 同 同
 あさましき賣つて戴く世辭を云ひ 名古屋 松井静子
 貧しさに馴れてますわと健氣な娘
 同 同
 叱られる窓に夕陽が美しい 松江 吉岡遷兒
 袖カバリーの色も赤なりタイピスト
 同 同
 宣撫班妻も支那語の唄が好き 布施 岩本晴美
 煙草値上げ
 禁煙に鞭打つ如く値上げなり
 同 同
 水槽に子が遊んでる無事な國 島根縣 新出谷一聲
 國民服出勤までの庭を掃き
 同 同
 寶塚あんたと呼べぬ人と来て 大阪 清水澄子
 大阪で買へる密柑をぶらさげて
 同 同
 會計は札を汚いものにして 大阪 佐野牛歩
 産み月がおなじで女話し合ひ
 同 同
 裸寝の眼に南洋のお月様 南 鍋島白帆
 流星一つあゝ蘭印やジャバの空
 同 同
 春の陽へ茂れつゝ錢數ふ 長野 堀内敏郎
 教會堂蟋蟀だけが歌つてた
 同 同
 總力と兎角聲だけ一步先き 山口縣 長野井蛙
 小郡町
 同 同
 複雑怪奇頼むは私の力のみ
 同 同
 内閣總辭職の日
 スキツチを入れたりや内閣總辭職 大阪 大坂清一郎
 同 同
 木枯に散る葉の如き彼なりき
 同 同
 手紙ではかなり皮肉も書く女 大阪 浪花駒志希
 これしきに義理を缺かさぬ隣組
 同 同
 ゆづりあひ貧しく暮しゐて 早崎山階子
 同 同
 託兒所の母待つ顔へ秋の陽の
 同 同
 神様に祈つた後はゴロリ寝る 満洲 和久洞人
 子を持つて滿洲の空故郷の空
 同 同
 出もどりの其れから派出な色を見せ 大阪 松下小柳子

誌雜畫漫全健

大阪クッパ

刊月

價 二〇錢
送 一錢

全國ノ書店
賣店ニアリ

發行所

輝文館

大阪市東區横堀二
振替大阪二六四番



秋空に心はだかにされてゆく 同

一パイ屋自轉車濡れたまゝ置かれ 大阪後藤和坊

長男も次男も茶ツ葉服で無事 同

朝露をりんかくだけの人が行く 岡山山上笑風

辻易者女に甘い影で立ち 同

迫撃砲か飯を食ひつゞけ朝鮮 上沼芥舟

陸軍病院

大丈夫大丈夫と白衣歩きかね 同

アソコのお口よごと一つづつ 大阪中西彌生

統制へ屋號のまゝで轉業す 同

最後まで聞けば夫をほめるなり 岡山岡田笛六

突出しの要らぬ銚子へ来て呉れず 同

賣切れ申候と老舗金があり 尾崎市長谷川三司

轉室のあとに團扇が残つて居 同

答みな兵隊さんになるといふ 大牟田上村十四之

孝行のおそまき乍ら墓が建ち 同

小休止それから皆無口なり 〇〇西垣錦風

虎造もアチャコも居ます軍旗祭 同

大別山攻略回顧(二句)

七草を揃えて擬装出来上り 布地 上田翠光

月光へにぶく浮き出た鐵兜 同

姉嫁く(二句)

灯ともせば夢さりやらぬ姉の部屋 岡山眞理子

もの言はぬ姉のひとみの黒かりし 同

親心一と匙づつの飲かげん丸亀馬場浪二

着飾つた事が恥し旅戻り 同

歸還兵許りで話凄くなり 松山沖原緑風

金鎚のありかを坊や知つてゐた 同

雲ばかり見る遠足へくたびれる 愛媛縣佐伯鶏城

兄弟の支那語へ母が寂しく居 同

其の筋に聞けば油も酒もあり 福津米倉右情

ウツカリと手相をみせて後悔し 竹原島 杉原愛鳩

ゴツ／＼の手へ國債が又買はれ 同

あほらしい盆栽が賣れ十二月 名古屋東正美

べろ／＼へ子供しようことなほに笑み 同

産婆さんそこまで来たと寄つてくれ 名古屋八幡勿來

十二月まどろむ猫に腹が立ち 同

擦り減つた疊に金と疲れてゐる 大阪藤森小雅子

もう一度財布を見てるコップ酒 大阪宮田不二

牧場の果て又其の果ての雲の峰 愛媛縣在間小樓

勉強に欲しい將棋のこの根氣 大阪木下誠治

歸還兵敵の強さも話して居る 長野縣牛山臥片

渡し舟今朝はパラッまじつてる 西宮名田榮坊

名案の主は末座にかしこまり 香川縣早馬清富

ものいはぬ牛の姿の頼母しく 京都林雨阿彌

從軍手帖より

高々と上るかん聲本部で聞きぬ 神奈川 尾崎綠柳

朝な朝な東に誓ふ再起の身 大阪山本葉光

三汀君を用ふ

君と僕喧嘩もせず別れたり 高松揚柳夢

暑いにつけ寒いにつけて支那の事 大阪中島晚成

役々に立つ身體部隊の變ること 大阪松永青雲

地名入りステッキ若い者が買ひ 大阪徳永鷺山

防空の備へ銃後の氣が揃ひ 大牟田平島平人

國を出て赤い滿洲で銃を執る 大牟田田中清次

ある程度まであきらめてゐる夫婦 大阪中野延婦

釣れない日道具のせいにしてしまひ 下關多田海朗

二階借向ひの間取見てしまひ 大阪岩本葉知朗

靈驗は兎も角母の守り札 大阪住岡義一

(某製鋼にて)

犠牲者を出しても懲りぬ怠慢さ 大阪古川鶴聲

空壕がすごいほどある統制下 島根縣田中弘樓



石小 秋豆 須崎

一列がつゞく。一人殖之二人殖えしてつゞく。つゞく。うしろの人が前の人へ問ひかけました。これいつたい何んだんネ、さあわても何だか知りまへんけど、まさか注射とは違ふやろ思もて列らばさせてもらてまんネ。」

某神社々前の机の上に置いてある印刷物を「御隨意にお持ち歸り下さい」と書いてあるのでお詣りをした人々が一枚づつ取つて行きまして。風に吹き飛ばされぬやうに印刷物へ載せてあつた小石が三つ四つ残つただけでやがてこの印刷物は一枚も無くなりました。そこへ地方田の團圓が参りました。「御隨意にお持ち歸り下さい」の立札と小石とをしばらく見比べたて居りましたが、たちまちにしてこの土のついた小石は三、四人のトランクへしまひ込まれてしまひました。



ふ嗤はンバ食

岡田某人

米が切符制になつて、一人當り一日二合何勺かにきまりました。するとおかしな事が始まりました。まあそういつたことは一番身近かな事柄ですから、何處へ行つてもその話で持ち切りですが、いろ／＼ひとの話をきいてみるのに、今まではよりはよく食へるやうになつたといふのが殆んどなのです。ある人は、これは坐

業の人なのですが、そうやかましく制限されるまでは、何かしかの晩酌で事足りて、御飯はどちらでもよかつた位なのが、あれ以来はどうしても二杯くらいは食へないとおさまらなくなつたといふのです。別に今までは、夜食の間食のといつて描つてはゐなかつたのですから、今更その二杯は不要みたいなのな筈が、

そこが人情といふのでせうか。勿體ない話ではありませんか。

そういへばお酒だつて、いくらでも出るとなると、そう大して飲めないのに、二本きり、あるひは一本きりとビシヤツとやられると、せめてもう一本となり、それがついまあ梯子の形式となることになるのです。そういつたことを、昔は、酒呑みはいやし、と聖人が仰言つたものですが、現今におきましては、米食のみその點については酒呑みにおさおさ劣りないこと、前述のとほりであります。

パンが少くなりなりました。するとパン屋の前に列が出来ました。食パンが切符制になり、隣組の通帳が配付されて、三日目か四日目に半斤買へるやうになり、行列はなくなりなりました。ただし菓子パンの場合はやはり一列です。そして切符制といふか通帳制といふか、その通帳には販賣の時間がきめてあるのですが、その時間が過ぎて餘分な製品のある場合には、當然書類の手續を要せず、誰でも買へる、あるいは自由主義時間となるのであります。すると町内御近所の面々が、悠然と小走りし群れ集つて買つてもらふのであります。

ですから、うまく時間を置つて外さなかつたら、殆んど毎日半斤乃至一片のパンにあつてゐることになるのであります。さてこのパンの行方といふのが、決して高踏なる理想の下に、米麥に代り、一食のつとめを果してゐるのではなく、食間のおやつ無賦食ひとなり終り、各人、それぞれ米麥の方の割當てには何等支障な

く責任を全うしてゐるのであるから、これもおかしな話の一つではありませんか。

さて、であります。大さつばに考へて、一體わたくし達は今までそんなに饑乏食パンを食へてゐたのでありませうか。食パンに限らず、菓子パンにしても、羊羹にしても、その他この頃皆さんが目の色を變へてまで買ひ誇り、以ていさゝかの哀しき欲望を満されるそれらもろ／＼のもの、そんなにも必要不可欠とするほどの日常であつたのでせうか。それなくては仕事にさしつかへ、或は親せおとろへるほどのものであつたのでせうか。まあ、どうやらそうでもなさ相です。その證據に、原料の都合で一週間も十日もパン屋が休業することが時折あるとはいへ、決して誰一人そのために病氣になつたといふ人もないし、子供のおやつに必要だといふ口上にもかゝらず、子供等は、元氣に陽の中、風の中を跳ねまはつてゐるではありませんか。それが無くて困つてゐるのは、パン屋さんだけだといふのが本當のことではありませんか。どうもおかしな話です。

二合三勺にしたつて、今となつては誰も何も云はないし、それで御主人はお働きの出られますし、奥様方は、秋冷の中、八百屋の前に立ちつくしても堪え得られる程、ましてやお喋りには決して事缺かれる譯ではありません。だから望むらくは、もう少し試みに減量を自覺的にやつてみられては如何でありませうか。適當な配合さへ守れば、食へ過ぎて病

氣になつた例はあつても、節食のために病氣になることはないやうでありますから。古の人は二食位であつたといふし、現在でも支那の勞働者それも重量運搬者でも二食、すつと瀧れば一食、更に農耕以前では食へない日もあつて普通たつたのでせう。だから皆死んでしまつたと云ふのは一口話で、それでも立派に生きて、野獸と闘ひ、天變地異に屈せず、今人よりもつと強く生活したからこそ、皆さん方が今働いてゐられるのだといふ方が事實でもあり、科學でもあるのではありませんか。

あゝ世にも食慾位悪いものが又とありませうか。まづ／＼理窟は抜きにして、お時間になつて、阪急食堂でも、其處らのめし屋でも何處でもよろしいから入つて、おしかけ詰めかけ、口を或はバクつかせモグつかせ、必死となつて顎を動してゐるさまをしつと冷静に、暫く眺めて御覽なさるがよろしい。これらの人々のうちには勿論、それのみに依存してゐる人もあるにはありませうが、百貨店食堂、何某高級食堂などに陣

取る人びとは、半時間一時間、長くつて三時間もすればおうちへ歸つてゆつくりと、うしろに立つてせかせる人などない食卓で食へられるものを。それとも歸るまでに倒れてしまふと仰言るのでせうか。あゝそんなら、昔食堂などのなかつた頃はひの人びとは、皆行き倒れになつた筈とは思召されませんか。何にしても喰ふ群衆の淺まきもいやらしく追力をも、客觀的に眺められたならば、餘分のものは食ふまいと決心なさるに違ひありません。そしてその決心が出来た人には、敢ておすゝめするのですが、若しもあなたが何か餘分のものを食へたくなつたら、取り敢へず前述の如き大食堂に入つて、昆蟲の如く動く類、野獸の如く陰翳する幽惡靈の如く見つめる眼を眺めていらつしやい。餘剰食慾の殺滅、立ち所に効を奏することでありませう。

それでも賦目なら、いさぎよく食券を買つて、人の背中を見て待つてそれから、その顎をガクつかせ、齒を鳴らせ、眼をかゝるかす場所へお坐りになるばかりであります。

Sato Special Klinik

呼吸器病科

佐多 加藤 謙一

螺長 四郎

院醫多佐

四八二八北電 町北鳥堂坂大



K市まで

麻生アート

過半はサラリマンだと思はれる乗客達の猿が、動もすると、車窓から覗み出しはせぬかと察しられた。車窓の外は、もうすっかり冬枯の景色を呈してゐたが、ぎつしりと載み込まれた乗客達の體温やなにかで、全く蒸せかへるやうであつた。つい横の方で備きあつてゐたブル・タイブの男などは頼りに手巾を使つてゐた。ベタベタと額の汗を叩いたあとで、グルリと大きな鼻面を拭つた使つた手巾を、ズボンのポケットに収めた頃には、又々ひとままりもない汗をかいた。虚勢いものなら、手の上げさげも叶はぬといふ人混みの中で、ブル・タイブの男は、手巾を出したり、ひつこめたりした。あんなに頻りに使ふものなら、別に一々収める必要もあるまいと思はれたが、その男は根よく、それを繰り返すのであつた。この男の姿勢には、誰しも呆然としたに違ひない。何故と云つて、その男の猿張つたこと、手巾を使はぬ方の手には、一冊の大きな書物が展かれてゐたからである。そして彼は睨めつけるやうな視線を、その上に投じてゐたが、果して讀んでゐるのか、たゞ、睨めつけ

隨想

丹波の猿公、猪公、其他

小山文三



◇ 由來丹波には
デツカンショ節
の
丹波笹山家の猿
よヨイ
花の御江戸で 芝

居する デツカンショく、
なぞの有名な俗語があつて、
今の東京九段の靖國神社が招
魂社と言つてゐた頃には其祭
りに當つて、玉乗りだの、眼
鏡のぞきだの、猿芝居なぞの
掛小屋が並んで、香具師連が
エーイ イラッシャイ、丹波笹
山で生踊りました大猿(御座)、
なぞと大聲で觀客を呼んでゐ
たのを想起するのである。
◇ 當時東都の學生であつた筆
者は是れを目のあたりに看も
し、聞きもして、何となく自
分の生國丹波が罵倒されてゐ
る様な心地がして同友間に大
いに其然らざる所以を辯疏し
た事もあつたが今でも東京以

東、以北では猿と云へば丹波
を聯想するらしいのは事實で
恰も因幡の兎と同様である。

◇ 丹波には尙一つ他國人から
忘れられない大江山の鬼があ
る、筆者が關東、東北、中國
西部、四國、九州地方を旅行
して、生國丹波を語つても、
今の國民教育を受けた青少年
達には兵庫縣北部とか、京都
府西北部とか言はないと、丹
波そのものゝ所在が、はつき
りしないらしいが反之大江山
の鬼とか、笹山の猿などを語
ると、直ぐ様丹波の地理的所
在の合點がゆくらしいのであ
る。
◇ 夫れ程丹波は鬼と猿に因縁
が深く、筆者にとりては、甚
だ淋しい様な、なつかしい様
な氣持になるのである。

捕獲した猪は篠山に集散され
て所謂牡丹肉として阪神から
東京あたりに珍重さるゝに至
つて居る、猪肉は春過ぎると
臭氣があるので、冬季に最珍
重されるのは申すまでもない

◇ 丹波の山奥の村に入ると、
往々村の山裾には高サ六七尺
中二三尺の苔、蕨なぞの蒸し
た、如何にも古そうなる石垣が
蜿蜒と續いて處々木戸口を設
けて通路を開き、恰も小さい
萬里の長城を思はせるものが
あつて、田畑及村家を山とを
區劃して居るのである、之を
猪垣と言つて田畑村落を荒す
猪の侵害を防いだものである
◇ 筆者の子供の頃には此猪垣
の外側の處々に設けた、直徑
三四尺、深さ五六尺位の古い
陥穽が残つてゐて、野猪なら
ぬ仔兎なぞが陥入つてゐたの
を見た事もあるし、さ程深い
谷でもない處で、木樵が仔を
連れた猪に襲はれて命からが
ら木によち上つて難を免れた
話をよく聞かされたものであ
る。

卷狩をやつた時最後の止めの
一發を大猪に呉れて名人の名
を汚さなかつた自慢話も聞い
たし、カメと呼ぶ其愛犬が、
猛り狂ふ猪の牙で咽喉首を掛
けられたのも屈せずして、最
後迄敢闘して猪を嚙殺したの
で伯父は腰の山刀で其猪の舌
を切りとつて愛犬カメに與へ
て殊勳を賞してやつた話や、
又當時の最新銃として謳はれ
た村田銃では、ほんとうの猪
打ちには出来ないで、やはり種
ヶ島の火繩筒に限るなぞと元
氣な腕を撫して自慢してゐた
事もあつたのである。

◇ 明治中期の頃には、まだ野
鹿もゐた、一郡内の獵師と勢
子が一團となつて數日に涉る
大卷狩をやつて、とうとう一
匹の大鹿を追ひ出したが、手
追となつた此鹿は、村の中を
逃げ廻つた末、大河の中を泳
ぎ廻つたか、兩岸の獵師の矢
玉に再び田の中を狂ひ廻り、
折柄勇敢な一農夫の、鉞の一
撃に倒れてしまつた事もあつ
た。
◇ 卷狩の獵師仲間では獲物の
分配に、やかましい規約があ
つて、鐵砲玉の當り工合や其
方向、打ち込んだ弾疵の大小

てるに過ぎないのか、一向ベージを纏らうとしない。あんなにしげく、手巾を出入れして、汗ばかり拭つてゐては、果して厭んでゐないにしても、決して無理なことではない。車中退屈であつた私は、まるで面白いものを見つけたやうに、男から視線を離さなかつたが、その裡、いつのまにやら、羨望のやうな心で一杯になつて、頑強な男の線をのみ見るやうになつてゐた。常に病身で、羸弱な筋骨の所有者であつた私も、今は却つて、自分の身體に對する憐憫など全く、何處かへ消し飛んでしまつたやうに思つた。ただ、圖太くて確かな男の體態が、頼母しく、羨ましく……そして、あんな男にふら下つてゐたら、どんな事があつても不安は無からう——と、潜在的な氣持で考へるのであつた。

汽車が淀川を渡ると、窓外は又、何んの變哲もない冬景色に廻へる。すつかり刈り取られて了つて眞つ黒な土地を露はに、冬の田畑が、すつと山麓の彼方まで續き、廣がり、見通せる感しは如何にも寒々としてゐた。先刻まで餘程遅いところに、小さく塊つてゐた家屋が、五六丁も向ふに見えるやうになつた。「さあ！あれがS町ですよ」と大聲で云つてブル・タイプの男は少し前かがみになり、手巾を持つたまゝの手で、例の家屋の塊りの方を指した。おやトと思つた瞬間、私は次に起つた聲を耳にしてゐた。「まあ嬉しい！そう仰言ればチツトも變つてませんわねエこの邊りの氣分は……」と之は中年の婦人の聲であつた。私は驚いて了つた。むつくりとして、忙しく手巾

輕重なぞ、然る可き評議があつて、其恩賞を明らかにするのが常例であるが、紋上の鹿の場合では農夫の鉄の一撃にも相當の恩賞が考慮された事は勿論であつた。

話は又猪に戻るが、筆者の丹波に居た頃、さる男が、十四、五貫の大猪をかつぎ込んで、

且那勝負して呉れませんか
か

と言ふのである。
由來猪は其皮、其肉、其毛共に賞用されるのは周知の通りで今更説明を要しないが就中其膽囊は民間薬として一入珍重され、且つ高價なものである、それに此膽囊は必ずしも猪の大小に比例しないで、小さい猪にも比較的大きな膽囊がある事もあるのである。こゝを以て獵師は萬人の持つ投機心を唆して未だ屠腹しない先に膽囊を富籤的に賣約に取り懸るのであつて、之れを猪の膽囊の勝負と言ふのである。

◇

且那と呼ばれた筆者は幾分自尊心も働いて五圓（附け加へて置くが三十年前の五圓である）と附値してみたが、此

男は二十圓を固持して譲らな
い、彼是れ仲裁も入つて十五圓で勝負する事に話が決つたのであつた。

かくて獵師は群がる大勢の
目の前で刃を猪の腹部に入れ
て血汐滴る手に膽囊を曳き出
して筆者に提供して呉れたが
思つたよりも小さくて徒らに
獵師に凱歌を挙げさせてしま
つたのも今は昔の思ひ出であ
る。

◇

明治、大正の文化は此丹波
の山奥にも電燈がつく、深山
は切り出されて猪鹿の住む可
き隠れ家もない。況んや猿
や、鬼をやである。いつの間
にか祖先の残した偉業の一つ
たる猪垣は取り毀されて大小
多數の苔むした石塊は河川改
修だの、道路の補装だのに徒
らにセメント工事の下敷とな
つてしまつて、猪垣の今は僅
に一部の残骸を止むるに過ぎ
ないのである。

文化の犠牲で猪垣のなくな
るのは一概にとがめられない
が、「備へなければ乗せらる
」諺の如く、昭和の此頃又々
時々猪公の作物侵害がある
らしいのは皮肉である。

◇

人は文化の惠澤に各々其生
活をエンジョイしたるが猪公の
世界には火薬の發達も、電氣
の普及も、林野の開墾も只是
れ迫害の加重に過ぎなかつた
然し種族保存の本能は猪公に
も根強く保たれてゐたのであ
つた。而も時代は移りて猪垣
の備へは毀された。農家の銃
器も錆びてゐた。獵用火薬も
複雑な手續でなければ手に入
らぬ時世となつた。卷狩の勇
氣と共同防衛の訓練は置き忘
れられてゐた。

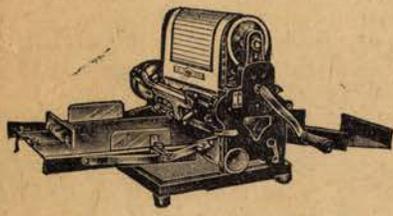
◇

此間に隠忍逃避の猪公にも
仔猪の繁殖は増して來て猪鹿
の作物侵害の歴史を繰り返す
に至つたのは文化の行過ぎと

村では急に狼狽し初めたの
である。恰も空襲防備にあわ
てた都會人が、お座なりの申
譯みたいになバケツ一杯の防火
用水と、小紙袋に入れた僅か
許りの砂を用意して居る如く
の自己満足に隋して居る如く
急に山裾に杭を打つやら、繩
を張り廻らすなぞ、笑止の極
を盡してゐるもの、生憎其防
備の纖弱さは連日連夜の猪公
の襲來に抗す可くもなく、徒
らに此跳梁に任せて食糧増産
と其確保の逆効果を示してゐ
るのは、祖先の偉業胃潰の致
す處と残念に思ふのである。
(未完)

堀井輪轉膽寫機

織細 速妙



大阪市東區平野町二

伊藤喜商店

電話北濱(23)〇三二四番
九州支店 福岡市上西町

(型錄贈呈)

を使つたり、讀みもせぬ書物を展いで読めつけてゐた男は、なんと、一人ではなかつたのである。連人がゐたのだ。そこで私は見るともなく、聲のした方へ向いた。男から箱々離れた所に、小柄で健康的で、品のよい婦人が一人、乗客達の間に、つましく兩の肩を測めるやうにして佇つてゐる。先づ頭は束髪で、片面を少しウェーブさせてゐる。顔のつくりも至極上品で、浅色の襟も細く覗かせ、しびい銀鼠の絹ものに、少し氣の効いたアブリケを小さく施した黒地の帯、それに羽織、帯留など一切の調和が、落付のある趣きを呈し彼女自身の内貌——とでも云つたやうなものをも、確かに表徴してゐるやうに見えた。驪で汽車はS町に着いた。モーニング姿のブル・タイプの男は、多くの乗客の間を、まるで草叢に別け入るやうな恰好で、出口の方に向つた。その後から婦人が従ふとして、婦人の方はどこまでも、つましい姿であつた。

汽車がプラットを離れると、私はいま得た許りの座席に腰を卸して、前の席の方へ、そつと兩脚を凭せかけた。それから、はじめて氣が付いたやうに四邊を窺つた。乗客が稍々少くなつたのと、座席を得たのとで隣分業になつた。四邊が急に静かになつた——と思ふと、ガタガタ急ぎ込んだやうな車輪の響きが、初めて耳に入る。さて、私の行く所は、即ち、この汽車の赴く所、K市である。私はこれから、K市のMといふ病院へ行くところなんだが、汽車が



柳川 佛說阿彌陀經

戸田 孤 篷

まへがき

亡父の月忌がすぎて間もなく京都の御本山へ參詣しての歸り佛典書司法藏館で隈部慈明師の好著阿彌陀經講話を手に入れ讀ゆく程にむら／＼と起る柳化の發願。

(一) 道は一つ

闇を照すものは光である。闇を知ればこそ清盛は陽を呼び戻そうとした。親のない子は夕やみをおそれる。折れてしまへば元のマツチの軸木でない。壊れないもの、變らないものへの憧れ。

鼻唄で燈臺の下漕ぎ抜ける孤兒院の砂場に玩具一つ寒れ

燃え移る軸木と問答してみたい

保険もつけずにシャ／＼と乗る昇降機

種明しすれば念佛一つきり

(二) なむあみだ佛

この世の中で「お母ちゃん」程いゝものはない。ヘソ子であらうがベソ子であらうが子供にしてみれば大事な大事な「お母ちゃん」。念佛—なむあみだぶつ——は生れる前、今死んでからを通じてのお母ちゃんの名である。その名前をのま、お經の名にとり魂のふる里——ごくらく——の有様を述べる。

たのみもせぬに着替到着し

みかへりの塔で母の名きかされる

「オカアチャン」

如是我聞一寸阿難は筆を置き

祇園精舎施主の太子と長者

(三) ふるさこ

あみだとは梵語で無量壽と云ふことである。限りのない生命と云ふことである。智慧第壹といはれる舍利弗さんも首をひねることを止めて佛の前に只頭を下げられた。たゞ頼む心に舍利弗さんなり

無量壽を抹香臭きき、流し

(四) しあはせ

持てば持つで、持たねば持たぬで思ふ様にならぬ。この世の母ちゃんでも頼まれもせぬのにそれ喰べものよ、それ着物よと御心配下さる。無量壽の母様が心の眼にはつきりとうつゝたら立つても居てもおられず母の名が呼び度くなる。

趣味だけに生きる父にはあらざりき

近づいてみれば青芝秀たら

(五) ふるさこの生活

母の名をよべばふるさこが眼の前に浮かんでくる。この眼に見えぬ魂のふる里の有様は佛様の麗筆にのつてその一部が夢の如く想像の世界を通じて我々の意識へもどる。極樂を説くに詩人の腕が要り

極樂といへばみせるとせがまれる

極樂を窮屈がるも凡夫也

(六) はゝの心

燒野のきりすではないが身を殺して子を守らうとするのはひとり人間だけでない。赤んべをすれはするほど可愛い、手

愛い、手

(七) たより

かりそめの旅に出ても、旅のたよりはしたくないもの、私共より一足先きに魂のふるさとへ行きつかれた方々がどんなに我々に知らしてやりたがつてゐられるか。

ふるさとにたよりに柿の赤いこと

もあつた。私は再び窓外に視を移して、モーニングの男と、品のよい婦人のことを想つた。

「まあ嬉しい！そや仰言れば！」と、婦人の聲が耳許で消える。低い、つましい調子であつたが、喜悅の感に慄へてゐた。理智的な裡にも、女性らしい情熱が溢れてゐた。あの婦人がモーニングの男の何に當るのかは知らぬ。妻と思ふに、想へぬこともなかつた。兄妹と觀るに、見えぬでもなかつた。昔馴染んだ友人同士である——と見立てることも出来た併し、そのどれかが、間違つた對比であるやうにも思へた——と、急に女の幻影が淡れてゆき、男ばかりが強調されて、グツと泣きあがつて来る。男はもう、書物を展いてゐない。さりとて汗を拭ふでもなく、赤ら顔を一層膨ませて、向ふをむいてゐる。モーニングの兩肘を突張つて混みあふ中を悠々と出口の方へゆく——之は少々不快だ。しかし、之が事實、その男が私に與へて去つた印象だとすると……。

私はもう、其際ことを考へるのが厭になつた。そこで私は一兎に角S町を懐かしむ婦人の方は、嘗てのS町を知る少女時代の彼女自身の姿であり、指して、あれがS町だと教へた男の方は、現在のS町を識る現實そのものやうな四十男の姿であつたのだ——とのみ想へばよい……。いまは葡萄色に暮れたつむ空に、初冬の浮雲を寒々と眺る。そして、K市にも程近くなつた汽車の窓から、は其際ことを思ふのであつた——。

(八) きつぷ

汽車の内では走る人が居るとかゝぬとか。じつとしてゐたつて時間が來たら目的地へ着く。信じる心のきつぷ一枚に安心露塵程も疑はず御まかせしてゐればよい。

母も子どもどつちもしがみついてゐる

蓮の座の隣りは御經も讀めぬ人

生々流轉流れにまかす心よ

靈臺車乘るなり寝れば音いてゐる

(九) みあかし

ふるさとのたよりをきき、たよりを見ても、この眼でみられぬ魂の世界の事は何となしに不安なのが人情、活字になつたピエローの案内記なら信するのだが

新聞に出れば真逆と疑はず

大説判砂の數程押されたり

佛説は舌の長さにまでふれる

山も川も草も木も人もふる里の名に於て私をあらゆる誘

惑から守り通して下さる。

糸くづの中から糸くづ捲きとられ

窓の曇赤い灯のこと忘れさせ

(二) はからひ

魂は魂でふれる以上に知る方法がない。しかも慾の塊みたいなこの心に共感を求めるにはよき人のおほせ——無限——にひざまづくより外に次第はない。そうして魂の母の愛にふれることだ。

地獄繪を見せてもへへへと笑ふだけ

慾望の研究をしてこはくなく

喜怒哀楽へ慾の筆法流れた

(三) よろこび

魂の母をふる里を、見た眼には聴いた耳には何にもましたよろこびにみちあふれてゐる。

御説法が終つて佛弟子達は釋尊の前を靜かに退出する

充血をした眼で祇園精舎出る

この心一つのための佛法僧

(父の四九日に書上)

化膿症

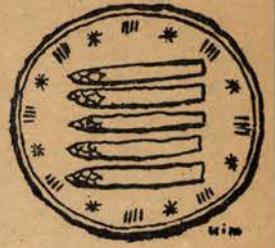
効奏期短・服内

中耳炎 扁桃腺炎 淋疾 化膿性婦人科疾患 皮膚化膿 盲腸炎

アールジール錠

製薬元 山之内薬品會社 東京・大阪

包裝 二十錠 五十錠 百錠



川柳 漫筆は動く

小畑 自有浪

日本から来る種友は閣下
なり (一浪)

嚴重な警戒裡に威、四邊を拂
うが如く、靜かに歩を歩ぶ大
臣閣下に

「閣下」と、群衆の中からの
び上つたみすばらしい老人が
あつた。

「こらッ、」警官の目が光
つた。

「閣下」

「おいッ、」

「おい、閣下さん」と、泳ぎ
出さうとする老人を

「待てッ、」と二三人の警
官が取つておさえた。

鉛筆をなめながら、新聞記者
が走つて来て、

「犯行の動起は」と勢ひ込ん
だ。

老人は捕へられたまゝ、泣く様
につぶやいた。

「権さんとわつしやあ、おん
なじ村の生れでやしてなあ」と、目を落したズボには、大
きなつぎが當つてゐて、泥が

はね返つてゐた。

お嬢さんと言争つて女中
去に (丹路)

「糠を先きに入れるのよ」

「いゝえ、鹽をばらまいて、

それから大根ほり込んで、糠
を入れるのでやす」

「違うつたら」

「違やせん、わし村の學校さ
で、わざ／＼東京から來んさ
つた、漬物の先生におそわり
ましたんやけん」

「ほつ／＼、田舎の山奥

へなにか來る講師にろくな者
はないわよ」

「とんでもねえ、なんでや
すかお嬢はん」

「うるさいわよ、あたしは女
學校で習つたんだから」

「でもわしの習つた講師さま
は」とかくて。

かがしかと思へは生きて

居に眞晝 (孤蓬)

「いてエッ、ちくしょう、

こらッ、待ちくさる、ひと
に石なんぞぶつつけくさつて

やゝい、そのハイキングのオ
ンタとメンタをふんづかま
てくんろうやゝい」

孟母訓ちと家倉が邪覺に
なり (貫志)

「だつてお前、こうして五十
萬圓もかけて新築して、先月
引越して來たばかりぢやない
か」

「たとえ、五十萬圓が百萬圓
無駄になろうと、坊やの教育
の爲にはかえられません」

「まあ／＼、お前の様にさう
極端なことを云うもんぢやな
らよ」

「だつて、テリヤの種のつけ
ますなんて、あのお隣の張紙
を坊やが見て、「種をつける
つてどんなことなの」つて、
あたしに質問するぢやござい
ませんか」

「はつ／＼」

「笑ひごとではございませ
ん。いくらそれが科擧する心
だつて、あたしがそれにどう
して名答が與えられませう」

休閒地うちの大根芽を出
さす (春菓)

「まあ、どのおうちもいき
／＼と芽を出してゐるのに、
あたしとこだけどうしたんで
せう」

「、、、」

「ねえ」

「、、、」

「あなた」

「うん」

「うんぢやないわよ」

「焦るな」

「御冗談でせう、ねえ、あな
たはたしか、農科の御出身で
したわね」

「でも大根の時方はおそはら
なかつたよ」

「だつて、松茸の人工栽培の
權威者なんて、御役所の方で
も相當認められていらつしや
るあなたぢやありませんか」

「大根と松茸とを一諸にしち
やあ困るよ」

「ぢやあ、此處へ大根の代り
に松茸を生して頂戴」

回覽板いとしい人の手へ
渡し (小松園)

「あのう」

「あら」

「今日は」

「いらつしやい」

「お父うさんは」

「お母さんは」

「市場」

「お爺さんは」

「先月死んぢやつたぢやない
の」

「あゝさう／＼、さうでした
僕ついうつかりしつちやつ
て」

「あら、それ、回覽板ぢやな
くつて」

「えゝでも、これ隣へ廻して
もらつちやあ困るんです」

「どうして」

「あのう兎に角困るんですか
ら、あなただけお讀になつて
僕の方へ返してほしいんで
す」

貫一になりたい様な月が
出た (貫次)

「あゝいゝ月だなあ」

「何をのんきなことを云つて
ゐるのよ、月と云へば今月の
つき末をどうするのよ」

科擧する心で時計壊した
り (灯筆)

「まああなた、おとなしゆう
してはると思うたら、わたえ
の時計をそないにばら／＼に
してしもうて」

「、、、」

「あなた、元々通りにしてお
くんははれや」

「はつ／＼」

「笑ひごつちやおまへんが
な」

「今日の日曜さつぱりわやや」

「一匹の蚤モーニング如何にせん (曹明)」

「あなた」

「うむ」

「始めてモーニングをお召になつたんぢやあるまいし」

「うむ」

「もぢくとしてみつともないぢやありませんか」

「うむ」

「子供のと代つて居るのですか」

「いや、たしかに吾輩のを着て來とるんぢやが、どうもそれがいかん」

「ほら、愈々式が始りますよ」

「うむ」

「あなたツ」

「うむ」

「みんなこちらを見て笑つて居ますよ」

「けしからん」

「でもどうなすつたんです」

「どうも蚤奴が一匹」

「まあ、不潔な」

「無口な人に大きなやつが釣れ (小櫻)」

「あんた失禮ですが、まだ釣はお始めてですね」

「へい」

「其の竿ぢやあね」

「へえ」

「餌は何をおつけです」

「ゴカイです」

「そりやあ駄目ですね、此の二三日前から潮がすつか代りましてね」

「はあ」

「海老でなけりやあ絶対にひませんよ」

「はあ」

「針は」

「つけとります」

「はつ／＼／＼、いや何分ですかとおききして居るので」

「さあ、何分ですか」

「いや、あなたのつけていらつしやる針なんです」

「それがその、去年、鯉釣に行つた時のまゝなんです」

「御冗談でせう、はつ／＼、いやあ、海釣に鯉釣りの道具を持つていらつしやるなんて、どうもあきれましたね」

「すみません」

「いやあ、あたしやね、知つたか風なことを云う様ですがこれで、釣にかけちやあ、三十年からり年を入れて居りますのでね、つい、お素人さつかいがしたくなりまして

ね」

「結構です」

「いやあ、さう素直にきいて下さると、つい、三十年來研究の極意と云ふ様なものまでお教へしてしまひたい様になつてしまふのですが、そも／＼この釣なるものはですね

おや、おや／＼、あなたの竿の先が頻りに動いてゐますね

はてな、そんな筈がないのですがね、呀ッ！

「釣れましたよ」

「はあてね」

「え、勿論よ」

「下駄もね」

「これから着物を買う時も一人で勝手に買つちやいやよ」

「あなたこそよ」

「はい、ゲンマ」

「ねエ」

「何あに」

「いつまでも／＼、二人は一心同體よ」

「まあ、今更そんなことおつしやるなん

て、あんた水臭いわよ」

「すんません」

「ねエ」

「うん」

「お嫁にも一緒に行かない」

「さうねエ、でも、それは困るわ」

「どうして」

「だつて」

「なぜなのよ」

「二人で一人のお聲さんなんて、あたし困るわよ」

豆腐屋の或日自家用だけつくり (狂艶)

「うちだけこつそりと作る豆腐だで、どつこへも云うでね

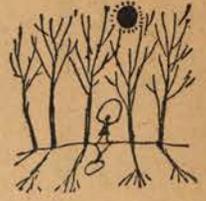
エだぞ、今日びのこつた、もう義理も人情もあるもんけいさうぢやねエか、わしとこに砂糖が無うて鹽なめとつたて切符がなけりやと、ほぎき居つて、一斤の砂糖でも廻してくれたことがあるかや、喃、米だつて辨寸だつてよ、なにもただでくんろというわけでもねエだに、ふざけやがつて酒の代りに酢が呑めるかつて云うんだ、べら棒奴、喃、本日てまへの方、豆腐仕り候へ共よ、ほしけりや実績と切符を持つて買ひにうせると、はつ／＼／＼、門口へ書いて張り出したるべいか。

アレ日易い
お肌には

朝な夕なにベルメルをお使ひ下さい。
カサ／＼のお肌もしつとりとして生々ど息吹いて來ます。

國産家庭常備薬
ベルメル
定価 十二錢、十四錢、一圓

大阪 日本除蟲株式會社ベルメル部



同舟近詠

松山 前田 五健

その美談故郷の山の名も知られ
仙人の杖に似たのをつき九十
旗日よし菊盛上りもありあがり
天壤無窮日本にだけある言葉

兵庫縣 御影町 長崎 柳秀

不自由は忍べと父は酒を飲み
子が病んで主義も主張も變る父

宮崎縣 橋本 克海

國策に濟まぬ商權擁護論
會社てふ名で商權は擁護され

奈良縣 龍田町 嶋田 翠峰

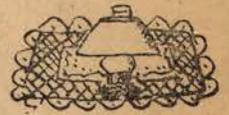
病妻も慰問袋へ何か入れ
お百姓さまくですとハイキング
手術臺何んの用捨もあらばこそ

名古屋 鈴木 可香

先驅者としていゝことを誇張する
十銭が大金だつた頃愉し

松江 勝谷 山川 兒

孫の世の事を思へり象牙パイプ
模擬彈が廓へ落ちた賑やかさ
出雲辯僕が削つた原稿だ
すゝき道逆光線の手入があるばかり
起きて寝て顔の手入があるばかり



川柳 題解と句例

(23) 妓生

—編 郎 路—

★富士ヤマと藝者ガールがある意味で日本を代表してゐたやうに、朝鮮半島を代表するものに、金剛山と妓生がある。

★妓生といふのは鮮人藝者のことで清楚な容姿が魅力の焦點となつてゐる。

★妓生の起原は新羅時代の源花であると書かれた案内書もあるが、源花は美女を國王に献じたのに過ぎないので、これを妓生の起原とするのは早計であらう。しかしこの時代に娼女や淫坊があつたやうである。

★高麗の太祖が三韓を統一した時百濟の遺民の中で水尺の一族（水尺といふのは漁、船頭を業とするもの）が、なか／＼手強くて制御しにくかつたので、それを各官に隷屬させ、男は奴とし、女は婢としたが、婢の中でも美容のものは妓として歌舞を習はした。これが高麗の女樂の濫觴であり、又妓生の起原だと云はれてゐる。要するに、妓生は高麗朝の初期に始まつて、高麗朝時代に非常な發達を遂げ、その制度を李朝が引継ぎ、今日に傳はつたものである。

★李朝時代の妓生は宮中の女樂で諸種の宴會に用ゐたものである。その弊害も認められて、廢妓論も出たが、表面的に堂々とした理由をつけて廢妓するにいたらなかつた。婦人の醫務に従事するものを醫女、裁縫をするものを針婢と呼んで、それに妓を兼務させた。従つて醫女を藥房妓生、針婢を尙房妓生と稱へ、妓生社會では第一流のものとされてゐた又邊陲地には將士を慰安する各目で妓生を置いたし、各郡では明使、清使、時には倭使の接待といふことを各目とした。

★宮中の諸大臣は云ふに及ばず儒生にいたるまで、妓生を聘して風流韻事に耽つたために、妓生の全盛時代が現出した。官妓の外に町家に妓生が出来、京城だけでなく各地に於ても次第にその數を増した。

★官廳の妓生は官妓と云つて、一種の役人であるが、町家の妓生もこの官妓を標準に、それ／＼技藝を修めてゐるので彼女等の氣位は非常に高い。

★平壤に妓生を養成する平壤妓生學校といふのがあつた。堂々たる學校で三學級組織で修業年限は三年である。必修科目は、修身、國語、詩文、圖畫、舞踊であるが、朝鮮の歌舞だけでなく内地の歌や洋樂まで教へてゐる。そして平壤産の妓生は京都藝者と云つた誇りを持つてゐる。★妓生の用ふる樂器は長鼓だけであるから歌舞だけ出来たらいいのである、がそれに詩文、書畫が出来れば上乗だ。近ごろでは多少容色がすぐれて舞臺の一つも語ふことが出来ればすぐ妓生と稱して客廳に侍るやうになつた。妓生の格が次第々々に落ちてゆくことは客の格の落ちてゆくことでもあつて社會の反映に過ぎない。

★従來妓生の社會には券番の制度はなかつた。置屋もなかつたし、屋形もなかつた。妓生は何れも一戸を構へて自宅にゐた。そして母や妹などと同居してゐた。大抵使用人がゐた。

★妓生に接したい場合には従來は客の方から信用のある確實な人の紹介で豫め時間を通知しておいて訪問するのが本則で、出先や旅館などで警察の厄介になるのは何れも不見轉妓生に限られてゐた。

★今村蝶英氏は「朝鮮漫談」に「昔は朝鮮には、料理屋と云ふものが一つも有りませんで、客は妓生の宅で遊んだものであります。而して遊ぶのにも、中々に面倒なる手順を要し、大官が富豪か、然らざれば其道に通曉せる粹人たる遊治郎でもなければ、其門を窺ふを得なかつたのであります。其の遊びの方法は仲介者の斡旋により、盟約成りし後は、十日とか一月とかを、妓生の家に入り浸り、酒食は皆妓生の支辨でありました。當時の妓生は、中々に見識ぶつて、今日よりは高尚で、遊びの味にも亦、悠長温雅な所がありました。」と述べてゐられる。★券番の制度は今から廿餘年前に

隣組産婆は私が呼んで来る
秋の雨外にスパイのゐる如く

十二月廻覧板へ書き切れず
誰も見ぬところで女眼鏡拭く
休閑地一番早く冬が来る

山口縣 三原狂路



川協の★

★へ★

★川柳人協會々長麻生路郎氏は郷土
勇士激勵の意味で堺市が發した「戦
線と銃後を結ぶ慰問誌」(銃後の堺)
誌上に「川柳に詠まれた行長」と題
し、堺の武將小西行長を詠んだ興味
ある隨筆を寄稿された。
なほ十日の夜、かき豊に開催された
堺市長の感謝宴に招待をうけ列席さ
れた。
★また氏は「東亞川柳」十一月號誌
上に感想文「滿洲へ渡つた時の想
出」を寄稿された。
★森東魚氏(北京)は十八日に歸國
され、同二十日川柳雜誌社を訪問さ
れた。
★梶子省二氏(光州)は多年本誌上
に武玉川研究を連載好評を博してゐ

るが、同氏は初秋頃より病床に臥さ
れ一時憂慮されてゐたが、病床にあ
りながら尙同誌研究に盡精されてゐ
るなどその學究的熱意には頭が下が
る。一日も早く全快されるやう陰な
がらお祈りする。
★麻生路郎氏は十七日有恒俱樂部で
催された海軍幹部と同俱樂部員の懇
親會に出席、雑感を述べられた。又
同俱樂部第十五周年記念會員餘技展
覽會及阪急厚生會展覽會にそれ〴〵
小幅を出陳された。
★臺中川柳會(臺中)では兼ねて計
畫中の臺中神社献納川柳額は、この程
美事に完成同神社繪馬堂を飾られた
尙前號掲載の如く、十一、十二の
三ヶ月間例會休會を豫定されてゐた
が、十一月より從前通り開會される
ことになつた。川柳界の爲め慶びに
堪へない。
★臺灣川柳會(臺北)十一月例會は
一日同市無盡會社樓上に於いて開催
★津田龍月冠氏(朝鮮)は十一月十
三日川柳茶話會を同氏宅に於いて開
かれた。又十八日社用の爲來販、來
社された。
★横山勝二氏(臺中)は一ヶ月程、
左足骨折の厄に遭はれ目下自宅にて

伯爵宋某の徳連で内地の藝者の制
度をそのまゝとり入れたのであるが
今日では舞衣や樂器を準備するばか
りでなく妓生の前借資金まで調達す
ることになつてゐる。
表情もなく妓生の唄になり

蝶炎

伯爵宋某の徳連で内地の藝者の制
度をそのまゝとり入れたのであるが
今日では舞衣や樂器を準備するばか
りでなく妓生の前借資金まで調達す
ることになつてゐる。
表情もなく妓生の唄になり

先輩は先づ妓生が聘んで欲し
明 娟
妓生へ通譯一人よく喋り 費 六
妓生に逢ふ嬌しさの神仙爐
五柳子
羽衣のやうに妓生見せて舞ひ
麗月冠

★墨西哥政府では明春より邦人の
入國を一切禁止する(十一月八日)
★正月用糯米配給を一人當り一升五
合と決定す。(十一月十二日)
★アメリカの資産凍結以來通信、交
通打開のため十月十五日派遣された
配船第一便龍田丸は船客八百六十名
を乗せて無事横濱港へ入港(十一月
十四日)
★兵役法施行令大改正により昭和六
年以後の丙種合格も召集することに
決定。又支那方面在留者の特例も撤
廢(十一月十五日)
★金屬類の特別回収初まる、世界一
と言はれる重量四萬貫の四天王寺の
梵鐘も献納。(十一月十六日)
★東條内閣成立以來初の臨時議會が
五日間に亘つて開會。(十一月十六
日)
★南九州に強震起り多数の家屋倒壊
す。(十一月十九日)
★東京千住驛にて列車追突、五十名
の死傷を出す。(十一月十九日)
★去る十五日施行の兵役法施行令改
正に伴ふ大學(豫科)高校の在學徵
集延期期間一部變更は陸軍、文部兩
省令により一年延長と公布する(十
一月二十日)
★大阪府下一帯の家庭へお酒の通帳

事務家必携
卓上日誌
OS
岡本ノート株式會社



氏藩の峰雲・布由・坊美・美船・水端・川紀・子清より右てつ向は眞葛
影攝者司三川谷長（日九月一十てに山草若良奈）

行吟長奈部支田梅雜川

俱樂部合同川柳會は二十三日午後一時より松坂屋四階集會室に於いて開催。

▼川維尼崎支部十一月例會は二十二日夜尼崎昭和荘に於いて開催。麻生霞乃女史出席。

▼阪急電鐵厚生會川柳會では十七日より一週間寶塚新温泉圖書館二階展覽室に於いて開催された同厚生會主催展覽會に色紙、短冊を出陳された。

▼川維岡山支部十一月例會は一日紫酒會館に於いて開催。

▼川維奉天會が吉田水車氏により十月二十五日光陽、窓花、吞湖、燕柳、路城、戰車、凡兒、三十三、蘇面、弘坊、千代一、柳谷、たかしの諸氏等と共に盛大に催された。

▼川維早稲旬會の十月第二常會が十月二十九日夜開催。

▼夷一笑、津路紅多呂、麻生アト諸君の結成する川維草會十一月例會は十四日夜一笑氏宅に於いて開催

▼川維堺支部十月例會は二十四日村上角堂居に於いて催す。

消息

▼本庄快談、吉田遊兒、村上四希、恒松可紅、石原松江子の諸君は三日秋色色ふる、大山に登山された。

▼戸倉晋天氏（不朽洞會委員長）は去る一日結婚媒酌のため夫人同伴にて上京された。

▼中島生々庵氏（不朽洞會員）は連休を利用して、三日晩秋の富士を征服、健脚ぶりを發揮された。

▼浪崎之介氏（不朽洞會員）松浦帆船氏、南要兒氏、赤土茂氏、永田淳三氏、川口一男氏は合同でこの程旬集「填水塔」（非賣品）を刊行、熱意の一端を示された。填水塔第二號の生れる日を鶴首する。尚玲之介、

柳望展

▼本社十一月例會は七日午後六時御津八幡宮で開催▼松坂俱樂部麻生路部川柳講座は二日午後一時▼有恒俱樂部川柳講座は十三日、二十七日午後五時▼阪大川柳會は二十五日午後四時▼警察病院川柳會は六日、十八日午後五時（十八日は有恒俱樂部に於いて開催）▼第四回有恒、松坂南

募集句 一路集 食後 丹路選



ペーチカへ食後の顔がよつてくる 小城子
食後のうたゝね猫がまね 正夫
晝食後裏の小川へ糸を垂れ さわだ
飽食を許さぬと言ふ食後なり 呆人
禁煙の食後さすがに淋しさう 十四之
食べました顔へ車掌のコンバクト 志都緒
満腹の食後日本の有難さ 秀峰
食べたからでよろしい用事頼まれる 喜一
小さい兒も食後に箸を戴けり 三丸
腹ごなし課長ラケット持つて起ち 清富
粉ぐすり食後嬉しく忘れられ 不二
朝食後カバンで帽子だそれ靴だ 牛歩
川端で食後の戀は私語かれ 小雅子
食前食後譯の分からぬ薬くれ 杜的
食後の膳うつかり汚いなと思ひ 正柳
飯の後何か食べねば居れぬ癖 鶴聲
屋上に食後が愉し晝休み 駒志希
馬になる食後の父も楽しさう 龜水
ビルディング食後と見えて頭・頭・頭 將雄
夕飯をすませ仰げば星白し 三郎
デザート柿に故郷ふと思ふ 榮坊
満足りて食後に想ふ聖戦下 芳雄
好い父になつて食後に開いてやり 葉光
夕食後向ふの窓にも獨り者 敏郎

名人 小松園選

食後もう戦地の事に觸れてゐる 靜子
朝食後出勤迄の如露をさげ 鷄城
夕飯をすませて友を悔みに出 鮎美
猫曰く骨も残さぬ世となりぬ 綠葉
喰べ終へて訪ふ人もなき吾がくらし 吐空
夕食後今日の無難を感謝する 詩朗
少年工夜學へ急ぐ箸を置き 武士
蔭膳を戴き母は夜を縫ふ 同
今食べたもの、値段を開く食後 登喜子
職工の食後しばらく手がきれい 同
二重マル食後の父へ見せに来る 千斗
飯ごとの御馳走さまも掌を合せ 同
豚曰クもう夕食の濟んだころ 抱逸
食後とて女寝るまで忙しい 同
（秀）食後よし苦勞甲斐ある子の元氣 照子
名人と言へば變窟かとたづね 詩朗
名人を訪へば傾く裏長屋 武士
名人の或る時濱にひとりゐる 駒志希
名人に釣られて得手をくぢかれる 抱逸
名人がみればなんとかなる細工 初舟
旅に出て又名人は名を残し 清富
名人に逢へば凡人らしい顔 不二
名人の眉が動いて歩が一つ 彌生
名人もやつぱり淋しい秋の暮 杜的
名人を訪へば寝巻のまゝでゐる 快哉
名人となればなか／＼はかどらず 呆人
名人の養子は月給取ると言ひ 榮坊
名人の幼い頃を知つてゐる 葉光
名人がムツクリ起きた午前二時 鷄城

帆船、淳三の諸氏は十九日出版後採
のため不朽洞に路郎主幹を訪問され
た。

▼橋本克海氏(宮崎縣)は警察界より
實業界に轉向以來三年、菓子工組
統制委員を経て現在油菓子工組監事
として不休の活動を續けてみられる
が、最近毎日報に川柳を掲載好評を
博してみられる由。

▼岩崎水虹氏(不朽洞會員)は姫路
陸軍病院にて、川柳同好の志を糾
合、度々句會を開催新進練成に努力
されてゐる。

▼岡田某人氏(不朽洞會員)は去る
十月二十七日姫路の岩崎水虹氏を訪
問、秋の夜を散談された由。

▼佐伯鶴城氏(松山)は十一月一日
白石大觀氏を迎へ、松前川柳會第一回
句會を催された。

▼正本水客氏(阿萬萬萬氏)何れも不
朽洞會員)は連れ立つて去る十一月
一日より五日間は新雪の見ゆる信
州方面を旅行され、句裏を満された
由。

▼橋本縁雨氏(不朽洞會員)は十一
月四日美奈子夫人を同伴、秋色の松
尾寺へ詣でられた。

▼小畑有浪氏(不朽洞會員)は雜
誌「明朋大陸」十月號誌上に川柳雜
子と題し、漫書挿入りて愚談式川
柳評釋を發表好評を博されてゐる。

▼岡田香桐氏(愛媛縣)は三年間大陸
方面で活動されてゐるが、此程國圖
再び柳界に返り咲かれる事になつた

新會員を募る

▼新體制下の常識として川柳を知り
たい人▼趣味として川柳を創作した
い人▼従來作つてはゐるが、よい指
導者が無いので一向進歩しないと思
はれる人々は▼松坂屋(日本橋筋三
の七階)にある松坂俱樂部の麻生路郎

▼田邊由布氏(奈良縣)は病氣發
中の處、此程全快され奈良方面へ吟
行に於かれた由。

▼黒川紫香氏(不朽洞會員)は二十
三日社用で下關へ出張され、川難不
關支部を訪問された。

▼奥田縁慶氏(尼崎)は十一月三日
華燭の式を挙げられた。▼米本貴志子
氏(不朽洞會員)は令嬢華子さんの
結婚準備で御多忙の由。

▼大坂形水氏(不朽洞會員)は十一
月一日の興亞奉公日に目出度く男子
を挙げられ名を英一と名附けられた
結局は書きよ、名附附けらるなり

▼橋口松風氏の數父は去る十一月十
一日永眠された。謹悼の意を表す。

▼岡田香桐氏は愛媛縣越智郡菊間町
北町へ。

▼原史風氏(不朽洞會員)は西宮市
産所町五八(電話西宮三七八)へ

▼上倉眞柳氏は滿洲國關島省延吉街
滿洲生活必需品會社支店へ

▼西川三味氏は大牟田市新港町一
倉土木作業所へ

▼西尾甫一路氏は大阪市北區堂島濱
通三ノ一大阪帝國大學病院官舎へ

▼岡田浮草氏(愛媛縣)は香桐に。

社の回覽板

▼師走川柳大會に關する打合せの不
朽洞委員會を御津八幡宮に於いて
開催。路郎主幹、普天、紫香、石鹿
玲之介、夜王諸氏出席

松坂俱樂部 川柳講座

川柳講座へ入會されたい。講座は月
二回、第一、第三日曜午後一時か
ら開講(作句・添削批評講義等)會
費一ヶ月金一圓。入會希望者は七階
の俱樂部受付へ申込まれたい。(川
柳講義幹事)

後記

▼日米會談が世界
の耳目を聳動せし
めてゐる際、本
誌は緊迫の躍進を
續けて十二月號を
刊す。

▼本號では月評に代はるべきものと
して不朽洞會員から、一人一句評を
募めた。「犀利雄辯」がそれである
短評ではあるがそれ、に評者のカ
ラが出てゐて、面白く、一讀する
と、誰がどんな句を愛好するかとい
ふ側面觀も裏へるやうな氣がする。

▼拙稿「吟行地獄」が本號
で完結した。本年の二月頃から幾度
奈良を訪れたか知れない。或る時は
大勢連れで出かけ、或る時は二三の
人と、或る時は一人で出かけた。そ
の間、常に私のよき案内者となり、
よき助手としてその勞を惜しまれな
かつた藤觀光課の佐野三造氏が盛夏
のころ奈良の地を離れられたからは
坂田公園課長兼觀光課長の好意で更
に藤田氏を煩はしたが、その後、同
氏は差支が多くなり、自ら先頭に立っ
て交渉にあたり、とうとう奈良篇の
完結を見るに至つたのである。本篇
は多くの文獻の渉獵と實地踏査と專
門家の援助と古老の傳説と、古川柳
の蒐集と臨地作句其他によつて脱稿
したものである。

▼私は一日の夜行で又福岡へ出かけ
ることになつた。今度は恩要も同伴
することになつた。私用で行くので
川柳家を訪ねる暇がないかも知れな
い、下關から廣島の支部の人々には
會へる機會をつくりたいとは思つて
ゐる。出来れば岡山へも寄りたいが
同行者もあるし、時間の都合がどう
にもつかないやうに思ふ。五日に阪
神電氣文化部の川柳會へ出席するこ
とになつてゐるので、何れにしても
五日には歸社する豫定である。六日
は別稿廣告にもあるやうに本社主催
の師走川柳大會だ。會の内容は没句
供養の夕で、斬捨て御免で多くの句
を没して来た私として、は嚴肅な氣
持で會に臨むつもりである。一人で
も多くの柳友の出席を期待したい。
同時に没になつた句主の不機嫌をと
りなしていただいた奥さん方へお詫
びと感謝の言葉を捧げたいと思ふの
で御同伴を御願ひする。

▼小畑有浪氏の「漫筆は動く」は
漫書を地で行くやうな軽快な筆致で
本誌作家の句を漫釋されたもの。黙
つて句を使つたので、ことわつてお
いて呉れおとすので、申出られてあ
るのぞお傳へしておく。

▼戸田孤蓬氏は「川柳世界史」の續

名人を無口なものにしてしまひ
名人の人生觀にとはれず
名人の名が知れる頃死んで行き
名人は短命にして惜しまれる
名人になつて上座へ進められ
名人の一個残して皆毀し
登喜子 (軸)名人の煙草は無駄な煙を上げ
同 鶴聲 (佳)今日からは名人と言ふ胸の音
秀峰 (佳)生きて来る作へ名人頬がこけ
緑葉 (佳)名人の眼鏡の奥の眼が細し
同 千斗 (佳)活きて来る作へ名人頬がこけ
清富 (佳)名人は仕上を見ろと言ふ構へ
葉光 (佳)名人は仕上を見ろと言ふ胸の音
正柳 (佳)今日からは名人と言ふ胸の音
小松園 (佳)名人の煙草は無駄な煙を上げ

▼須崎豆秋氏が珍らしく隨筆「小石」
を執筆、氏の風格が躍動してゐる。
一讀微笑を禁し得ない。

▼丹路句集「二のむら」刊行の廣告
を見たところ、多数の方々から豫約
申込みがあり、是非とも本年中には
刊行して觀望に應へたいと、愈々上
梓の段階に移つてゐたところ、突然
著者から刊行を無期延期してはとい
ふ提案があつた。その理由とするこ
ころを検討し、著者の謙虛な態度に
うたれるものがあつたので、直ちに
刊行をとりやめることとした。豫約
申込みをされた方々に對しては相濟
まめ次第であるが、御寛恕を願ひ
する。尤も原稿はその儘、著者の手
許に保管して貰ひ、今後の作品を増
補して他日刊行の機を待つこととし
たのであるから其の點もお含みを願
ひたい。

▼信州の川柳人、石曾根民郎氏の民
郎句集「大空」が電撃的に刊行され
ることになり、既に中身は刷り上つ
てゐる。あとは刷や、製本の仕事を
餘すだけになつた。異色ある作家の
作品を次ぎ、に世に問ふことは大
きなるこびである。二百部限定刊
であるから賣切れぬうちに至急申込
まれたい。(路郎生)

麻 生 路 郎 著

新川柳評釋

發行所 不 朽 洞 振替大坂三〇三番二九

★定價八十錢 (送料)六錢
★海外注文は送料實費加算を乞ふ

モヒ患もさし向き困る北の風
二三日來ぬは死んだか阿片窟
奮然な顔でモヒ患盜つて行き
モヒ患はシャツ一枚になつて雪
敗戦へモヒの切れる顔ばかり

人輪からモヒ患生きてみた歩み
血と汗が大満洲をきつき上げ
風の上に満洲行の荷をまとめ
満洲のこんな處に絵る稻
満洲のこゝもかけ聲ほどでなし

路城 驢馬が囁く彼方入日が美しい
燕柳 世をすねてすねて満洲迄流れ
戦車 死に行く様に渡瀟を母案じ
燕柳 満洲の土になる氣の協和服
吞湖 あるもんですます鏡後の氣の軽さ

窓花 聖譚の意氣晴國の社前から
戦車 聖戦へいよ／＼澄みし五十鈴川
吞湖 これからがほんとに強い日章旗
水車 鐵兜五年の色も尊くて
吞湖 聖戦は今尙續く麥の色

三十三 水車 光陽 水車 戦車

愈々充實せる

そごうの

慰問用品

慰問用品の御相談は
、 歸還勇士が擔當、
萬遺憾なきを期して
居ります。



階地…賣場品問慰



そごう

事 幹 と 部 支

道頓堀支部大 阪(萬よし)
函館支部函 館(展修)
梅田支部大 阪(鮎美)
篠川支部島 根(縁之助)
鳥取支部鳥 取(鐵州)
松山支部松 山(耕一路)
天王寺支部大 阪(八九滿)
鶴町支部大 阪(双虎)
御池橋支部大 阪(夢裡)
松江支部松 江(山川兒)
大鐵局支部大 阪(柳太)

西條支部愛 媛(英賀夫)
城南支部大 阪(申仙)
今治支部今 治(文庫)
川光笑會大 阪(里十九)
竹原支部廣 島(芳郎)
廣島支部廣 島(久米雄)
豐中支部豐 中(紫香)
下關支部下 關(半休)
北鮮支部羅 津府(美笑)
蒙疆支部張 家口(柳路)
上海支部中 華(天作)

鐵道病院支部大 阪(春菓)
渚支部大 阪(みのる)
四ツ橋支部大 阪(翠芳)
布哇支部布 哇(覺花麗)
堺支部(堺)角 堂
岡山支部岡 山(九坡)
尼崎支部尼 崎(美知夫)
日和佐支部 德島縣(賢次)
日早鐵會大 牟田(蝶人)
大洲支部愛 媛縣(椋影)
小郡支部山 口縣(井蛙)

主 幹 藤 生 路 郎
贊 助 員 池 澤 樂 居
長 谷 川 一 徹
大 道 弘 雄
岡 本 一 平
片 岡 直 方
笠 原 路 生
嘉 納 純 二
田 中 辰 秀
長 崎 柳 秀
長 岡 半 太 郎
長 野 晴 濱
藤 本 卯 之 助
藤 本 卯 之 助
顯 原 退 藏
淺 田 一
末 弘 巖 太 郎
客 員 鳥 山 一 步
沖 野 岩 三 郎
大 島 瀧 明
大 谷 五 花 村
龜 井 辰 修
川 村 花 菱
米 村 あ ん 馬
田 村 孝 之 介

谷 脇 素 文
高 尾 亮 雄
生 方 敏 郎
窪 田 銀 波 樓
山 本 雨 迷
安 川 久 留 美
前 田 五 健
柴 谷 春 二 郎
篠 原 幸 二 郎
蛭 子 省 二 郎
藤 里 好 古 魚
森 東 魚
不 朽 洞 會 員
橋 本 綠 雨
高 橋 か ほ る
福 田 山 雨 樓
西 田 艸 樂
永 田 里 九 路
奧 村 柳 路
岩 崎 柳 路
寺 井 鏡 々
大 西 八 歩
高 澤 一 浪
戸 田 孤 篷
石 井 白 面 人
川 出 美 根 子
中 島 生 々 庵
戸 倉 普 天

小 畑 自 有 浪
古 川 風 竹
前 山 北 海
古 川 覺 花 麗
岩 崎 山 石
藤 本 貴 志 郎
米 本 草 一 郎
三 輪 晚 翠
水 谷 鮎 美
大 坂 形 水
田 中 兩 月 三
平 佐 平 三
橋 本 波 夢 造
藤 岡 至 藝 瑠
西 川 青 美
★
姫 田 夕 鐘
村 松 夢 裡
市 場 沒 食 子
吉 田 九 水 車
妹 崎 八 豆 秋
須 崎 紀 太
春 元 紀 太
宮 岡 白 峰
石 曾 根 民 郎
中 西 お さ む
原 史 風
正 本 水 客

黑 川 紫 香
丸 尾 潮 花
岩 橋 雙 虎
岡 田 某 人
岩 崎 松 代
酒 井 斗 風
北 川 筑 巢
小 林 燈 舍
尾 崎 方 正
佐 竹 香 附 子
押 谷 た け を
關 根 山 彦
西 尾 榮
多 田 不 波
櫻 川 水
中 風 葉
中 原 統 人
演 田 久 米 雄
好 崎 申 仙
杉 原 小 研 子
魚 澤 滿 潮
岩 本 雀 踊 子
清 水 友 帆
石 野 秀 雄
清 水 史 路
清 水 白 柳 子
中 西 翠 芳

多 田 市 多 樓
濱 田 賢 次
森 宗 男
大 森 風 來 子
鈴 木 九 坡
逸 見 灯 峯
石 原 伯 天
植 山 一 笑
夷 山 鹿
鈴 木 石 童
波 邊 曉 堂
矢 野 赫 堂
月 原 背 明
高 山 抱 逸
篠 田 篤 彦
國 弘 半 休
道 廣 世 紀 彦
岩 崎 水 虹
岩 崎 勇 記
阿 萬 萬 的
谷 川 綠 風
小 林 文 月
酒 井 美 知 夫
飯 尾 寄 史
小 川 恒 明
野 口 柳 太
津 路 紅 多 呂
河 野 夜 王

募 集

第十九卷 第二號課題
十二月廿日締切

雪 空 岡 田 某 人 選
軍 事 便 高 峰 柳 兒 選
(十句以内)

第十九卷 第三號課題
一月廿日締切

戰 闘 帽 市 場 沒 食 子 選
腕 河 野 夜 王 選
(十句以内)

第十九卷 第四號課題
二月廿日締切

劍 道 池 田 可 宵 選
同 窓 寺 井 鏡 々 選
(十句以内)

每 號 募 集 (每月五日締切)
近 作 柳 樽 (廿句) 藤 生 路 郎 選
川 柳 塔 麻 生 路 郎 選
同 舟 近 詠 麻 生 路 郎 選
各 地 柳 壇 (會 報)
文 章 (評 論 研 究 感 想 吟 行 漫 文 漫 畫)

投 稿 規 定
▲ 投 句 は 本 社 發 賣 の 投 句 用 箋、官 製 葉 書 又 は 同 型 の 原 稿 紙 に 各 種 各 題 必 ず 別 紙 に 認 め、住 所 氏 名 雅 號 を 明 記 す る 事。
▲ 「近 作 柳 樽」は 全 作 家 の 雜 吟 を 募 る 限 る。
▲ 「川 柳 塔」へ の 投 句 は 不 朽 洞 會 員 各 地 會 報 は 半 紙 判 原 稿 紙 に 清 記 の 事。
▲ 文 章 は 二 十 字 詰 原 稿 紙 使 用 の 事。
▲ 書 體 は 正 しく 楷 書 (川 柳 雜 誌 原 稿) と 封 筒 に 朱 記 の 事。
▲ 締 切 は 嚴 守 さ れ た し。
▲ 投 稿 其 他 に つ き 御 問 合 せ は す べ て 返 信 料 封 入 の 事。

規 格 判 B 列 5 號
川 柳 雜 誌 第 十 八 卷 第 十 二 號
每 月 一 回 一 日 發 行

定 價
一 冊 金 三 〇 錢
半 年 六 冊 金 一 四 〇 錢
一 年 十 二 冊 金 二 六 〇 錢
(送 料 十 錢)
外 國 送 本 には 海 外 郵 送 料 實 費 の 加 算
御 註 文 は す べ て 前 金 で 願 ひ ます。振 替 (大 阪 七 五 〇 五) 又 は 小 爲 替 を 御 利 用 願 ひ ます。御 註 文 は 何 月 何 日 及 び 何 時 指 示 願 ひ ます。轉 居 又 は 改 號 等 の 節 は 舊 新 併 記 の 事。

昭 和 十 六 年 十 一 月 廿 五 日 印 刷
昭 和 十 六 年 十 二 月 一 日 發 行
禁 無 斷 轉 載 本 誌 の 刊 行 は 有 保 證 新 聞 紙 法 に 據 る

本 誌 廣 告 に 御 用 の 節 は 川 柳 雜 誌 社 廣 告 部 へ 御 一 報 下 さ います せう。

發 行 所 川 柳 雜 誌 社
大 阪 市 西 區 江 戶 堀 上 通 丁 目 四 六 番 地 (昭 和 七 五 〇 五)
振 替 (大 阪) 七 五 〇 五
電 話 土 佐 堀 八 一 六 三 番 番
大 阪 市 西 區 江 戶 堀 上 通 丁 目 四 六 番 地
行 印 刷 所 麻 生 幸 二 郎

東 京 市 神 田 區 淡 路 町 二 丁 目 九 番 地
配 給 元 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

★ 毎 號、戰 線 の 勇 士 に 送 ら れ た い 方 は 部 隊 名 を お 示 し の 上 本 社 宛 に 御 申 込 み 下 さ れ ば 郵 税 を 奉 仕 し て 直 接 發 送 致 し ます。

送 住 本 所 住 者 名 氏

アサヒビール

大日本麦酒株式会社

含有滋味が
もたらす
元氣

愛飲家に
確認さる

ガラス壘代用

紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・

組立式各種・薬品・食

料品・菓子等の容器と

して最適



大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番
工場用 同 五八〇三番
五八〇四番



のた
めに

片瀬醫學博士
「安産のために」冊子呈上

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

榊林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査



ブダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

鍊成の冬

摩耶六甲へ

君と僕

神戸から大阪へ

大阪から神戸へ

待たずに乗れる

阪神電車

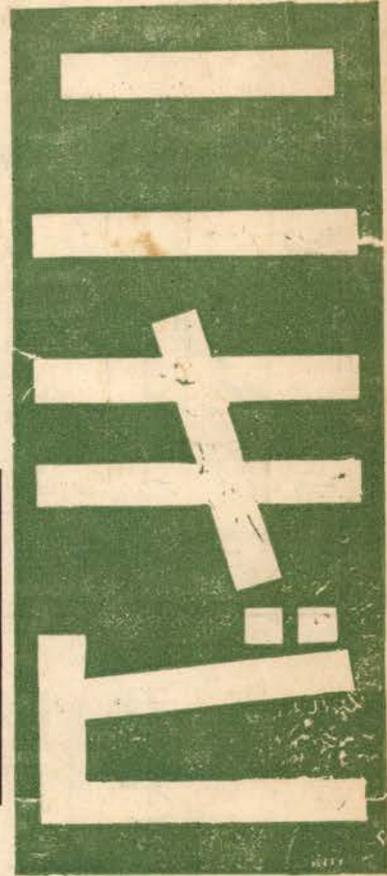
SENRYU ZASSHI

No. 215

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

りとびきに

美顔水



蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時!

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧! ゼヒお勸したい薬です!

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり

阪大・京東

館天順谷桃

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
藥	に	.